

---

# あなたとご飯と私

コリクー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたとご飯と私

### 【Nコード】

N2015S

### 【作者名】

コリクー

### 【あらすじ】

OLの片岡真由子はいつも優しく社交的に見えるけど、実はネガティブで昔の恋愛を忘れられなかったりトラウマを抱える25歳。趣味は料理だがお菓子はあまり作れず。ある日子猫と成猫を拾うが実はその猫たちは……。異世界で溺愛されたり懐かれたりご飯を作ったり大変な日々。そして真由子に起こった変化により周囲が変わってゆく……。くたまにコメディ、たまにシリアスなのんびり恋愛ファンタジー\*R15です、ご注意ください！>



## 拾った子猫（前書き）

初めまして、コリクーといひます（^^）

私の好きな猫と料理というものを組み合わせてみました。ちなみに恋愛ファンタジーです。なにぶん初めてなのでうまく書けるかドキドキしています。文字でのミスや読んで違和感などありましたら「ここが・・・」と教えて下さい。

まだ色々と分かっていますませんが精進します。スローペースな更新になってしまうかもしれませんが頑張りますのでよろしく願いします。楽しんでいただければ幸いです\*

## 拾った子猫

「にゃあにゃあ、なうう」

どこかで子猫が寂しそうに鳴いていて、私も一緒に泣きたくなつた、片岡真由子25歳の春。

今日は仕事ではミスをし帰宅する現在の時間は23時、最近はお花症で鼻水がひどい、お気に入りの靴下に穴が開いていてショック、仕事が忙しくて食事をおろそかにしたため自慢の美乳がDからCカップになった。これはオンナとしては大事件である！

そして・・・恋愛もうまくいってない。

「なあっ、うにゃあー」

3年前の大学時代に、少しだけ付き合ってた彼から連絡があった。友達期間1年、交際期間3ヶ月。はたして付き合っていたのだろうか、と謎に思うこともある。

いや、付き合ってたければキスやあんなことこんなことしないはず・・・

今ではお互い友達で、そのメールは他愛ない内容だったけど嬉しかった。そして同時に、なんだか情けなくて悲しくなった。

「みゃうー、んにゃあ」

今のような桜の季節に出会って友達になり、焼き芋がおいしい冬に付き合い始め桜の季節に別れた。

まだ忘れられない。まるで私だけ時間が止まっているみたい。

そいつには2年間付き合ってるかわいい彼女がいるのに、私はまだ進めてない。そいつが私のところに戻ってくると信じているのだろうか。そんなことはない、だって私はかわいって感じじゃない。素直になれないは性分だからしょうがないんだ。

「んにゃうん」

いつまでもその人のことだけはダメだと思って他の人に目を向けただけ、どうしても恋愛感情はあまりわかなかった。

一体どうしたらいいんだろうか……

「にゃうん、うにゃっ」

「ああもう、猫！うるさいっ！」

全く感傷にもひたらせてくれないのか！と、私は辺りをキョロキョロと見回した。すると、私の住んでいるクリーム色のアパートから真っ黒な子猫が「なんっ」と一鳴きしピョッコリと現れた。

長いしっぽはゆらゆら揺れていて金色の瞳でこちらの気配をジッと窺っているようにみえる。……かわいいじゃないか。

「おいでーにゃんこ」

猫はもとと大好きなので、思わずかまいたくなりスーパーで買ったかまぼこを取り出した。

こんな夜更けにアパート近くでかまぼこを振り回すなんて、怪しい人決定だ。ご近所さん、スルーし、て、ね。

思わず感傷気分は吹っ飛んだ。猫に感謝。

黒猫はしばらくジッとしていたが、たたたと走ってきてかまぼこの匂いを確かめパクリと食べ始めた。んにゃうにゃ、ハグハグ言ってるかわいい。

「はー猫はいいわ。一緒にいても感情に左右されなくてすむもんね」

どっこらしょつと腰を上げ、猫にバイバイをしてアパートの方へ足を向ける。

するとトトトツと音がして私の脚に身体をすりつけ「にゃうん」と、一鳴き。うるうるした目でまるで拾ってと言ってるみたい。

私はうーん、と頭をぼりぼりかきつつにゃんこをアパートへ連れて帰った。

ま、いいか。大家さんにバレなければ！一人暮らしは気楽なもんだなあーとドアを開け暖房を入れた。

「この家に誰かがくるの久しぶり。猫でも嬉しいわあ。いらつしやい猫ちゃん」

「にゃん」

おじゃまします、と言われたみたいでなんだか心が温かくなる。

私が勤めているのは貿易会社の企画部門なんだけど、そこでは「にこにこしているけどクールで謎な一面がある女」というわけがわからない称号をもらい、他人と距離を置いていた。私も自分がどんな人間かわかっていない。

でも仕事はそこそこ出来ると思う。今日は企画の仮案を名川部長に届け忘れて、チェックしてもらい再度作り直しという残業をしていたけれど。そう、企画は何度も何度も海外や国内企業で通用する斬新なチャレンジやプランを生み出さなければならぬ。知恵と時間の勝負なのだ。

名川部長は愛妻家で知られる50代のちょっとぽっちゃり紳士で、今日も「片岡さんがミスするなんて珍しいね。修正したプランは明日日まで提出待つから今度はしつかりね。一緒にがんばろう」と、言ってくれた。このお父さんみたいな存在は心をぽかぽかにしてくれる。

他人と距離を置くけど、仕事を円滑にするためにいつもにこにこでも絶対にプラーベートには立ち寄らせない。



この原因はなぜだろうと思い・・・ふと田舎にいる家族を思い浮かべる。

その後、うじうじしててもしょうがない！腹は減っては戦は出来ぬ！

と、作って冷凍していたハンバーグを焼き大根をすり下ろしポン酢をかけて、菜の花の辛子和え、朝作ったインゲンと豆腐の味噌汁、それとノンアルコールビールといっしょに遅い夕食をとった。

お酒が飲めないのはイヤだね。ビールや焼酎でプハア！といったみたいものです。

にゃんこは私が作った、かまぼことインゲン入りのお粥を食べている。またハグハグ言ってる。癒されるなあ・・・

## 拾った子猫（後書き）

ど、どうでしたか！？この猫は秘密があります。なんとなく想像付いていらっしやる方もいるかと思いますが（笑）

もし、こんな料理出してほしい、というのがありましたら教えてください。話に登場させちゃいます！次回は真由子は猫に名前をつけます。2話目にしてR15になりそうで恐いです。

綺麗にならない？（前書き）

こんにちは。桜が咲いてきましたね。近所では桜祭りなるものがありました。某検索サイト様に登録しようと考えていますが、パソコンに疎いために軽くパニックです・・・絶対なんか間違ってます（^^;）

ではお楽しみください。

綺麗にならない？

「ごちそうさまでした」

テレビで今日のニュースをチェックしつつご飯を食べ終え、すでにご飯を終えた子猫を膝の上に乗せ紅茶を飲んでいる。

今日の紅茶はミルクたっぷりの「アッサム」で、それにすりおろしたショウガを少しとハチミツもいれてある。

子猫はお腹いっぱいになったのかゴロゴロと喉を鳴らしている。時折、ジツと見つめてくる。

「どしたの、にゃんこ？私が美人だって？」

一人暮らしならではの独り言をいしつつ肉球をムニムニする。ただお腹いっぱい眠いのかそれが気に入らないのかわからないけど、「なん」「んにゃっ」など鳴いている。てしとパンチされても痛くも痒くもない。

その時携帯にメールがきた。差出人は……過去の人。嫌いになって別れた訳じゃない。ただ遠距離恋愛になってしまつてうまくいけなくなり、向こうから別れを切り出された。

――――

『ごめん、やっぱり離れるとだめだ』

付き合って3ヶ月目。なんとなくそんな電話だろうと分かっていたので、強い女を演じるしかなかった。

引き止めるなんてできなかった。なんだかむなくなる気がするし、何より相手がそういう女の人を嫌がる人だった。

『いーよ、そろそろそんなこと言うてくるのわかってたしね』

『うん。ごめんな』

『ハイハイ、まあ友達に戻ろう。あんまり私のことは気にしないで大丈夫だからね』

精一杯声だけでも元気なふりで大丈夫と言い強がった。友達というポジションだけが唯一の橋だ。好きなのに別れた。それがつらい。だから何年もしこりになってる。別れて以来会ってないのに友達として存在してる私は一体……

この前久しぶりに届いたメールは共通の友人が入籍したということこ

と、ヘッドハンティングにより転職したことの報告だったのでとても楽しくメールできた。入籍の話はおめでたい上に嬉しいものだし、仕事先の件も頑張ったんだということが分かる日本最大手の証券会社だった。そう、こんな風に何ヶ月かに1回はメールが送られてくる。

しかし今届いたメールには彼女がよくわからないという恋愛相談だった。それに適当にアドバイスなど返信をしてメールを終えた。

何だか無性に泣きそうになった時、下から視線を感じた。

私の顔を観察してる。膝の上で丸まっている猫の金色の目が私の情けない感情を読み取っているように見えた。

アッサムをぐいっと飲み干し、猫をソファの上に乗せて頭をぶんぶん振る。

「さ！明日のお弁当の準備して食器洗ったら猫も一緒にお風呂入ろうねー」

「にゃうん？」

何を言われたのか分からないからか、私のテンションの浮き沈みを不思議に思っただのか、猫は小首をちよつと曲げてソファの上でお座りしていた。

明日のお弁当は、今日の残りの菜の花の和え物と唐揚げと卵焼き。

卵焼きは毎日朝につくる。気分によって砂糖だったり、ダシ巻きだったり、醤油マヨネーズだったり、青のり入りだったりする。

唐揚げの下準備をして完了！このストレス解消兼節約の趣味は本当に最高だ、と自負している。

お風呂の準備が整い、洗面台の前に立つ。

最近忙しかったからかなり痩せちゃったかな。肌荒れはないみたいだけど……と、ブツブツつぶやいていた。

実際、真由子は痩せている訳ではなくスレンダーなだけだ。大学時代の友人や会社の同僚からは「真由子はなにを食べても太らない」となぜか怒られていた。

身長165cmでスラリとした腕と脚、そして色白の肌とぱっちりした目と紅い唇、腰までのちよつとだけ内側にくせ毛がかった漆黒の髪が存在は、彼女を強くも見せ、また儚くもみせていた。

それに加え、笑っていても何を考えているか読めない、また謎の私生活などから一部の男性から「深海の黒百合」とささやかれていた

ることを、本人は知らない。

まあ特に進んで恋愛をしようと思っていない真由子は自分にあんまり興味がないようだが……

「猫ーお風呂入るよ、綺麗にしてあげるー」

私はまず脱衣所にいた猫を先にポイツと浴室へ放り込んだ。そして自分も服を脱ぎ髪を一つにまとめ浴室へ入った。すると、水がたまった浴槽を不思議そうに観察していた猫が振り向き、ぴょーんと飛び上がった。私もビツクリだよ。

「に……にゃ!？」

わたわたと地面を掻きながら前へ進もうとするがタイルが滑ってうまくいかないみたい。びっくりして爪が出てるからなんじゃないのかな?思わずクスリと笑いが漏れてしまう。

「さあにゃんこ様、お身体洗いましゅうね」

しかし捕まえようとすると、



「んなっ！にやう！にぎやううう！」フーツと怒られてしまった。

ムンズ！と捕まえ、ぺたんと女の子座りをしていて付いていた両足の太ももに猫をはさみ、向こうを向いていた猫の背中からゆつくりとお湯を掛けた。

一瞬ビクツとしたが、次にはトロンとした目で「んみゃウー」と何とも気持ち良さそうな声で鳴いていた。

こつちをむかせた際に再度ビクツとして目が泳いでいたが結局おとなしくなってくれた。

「ふんふん、ふふーん」

鼻歌を歌いながら猫を無添加ハーブ石鹸で洗った。動物用シャンプー買わなきゃね。

しばらくじっとしていた猫だが突然、てっちてっち、むにむにと私のお腹や胸をぺちぺちと肉球パンチしてきた。

「あつ、やつ、猫！なんて失礼なの。女の子のお肉はやわらかいんだから。もー」

しばらく私の邪魔にならない程度に私の胸を中心にたたいていた

ので放っていた。だって猫だしね。爪さえたてなければいいしね。

「あんっ、そこはくすぐつたいからダメ」

しばらくして泡を落とす為にお湯を掛けようとしたらパンチを断念してみたんだ。今はプルプルと身体を震わせ水はじいて毛並みを整えている。

私は自分の身体を洗い、浴槽へ入る。

どうやら猫も入りたいみたいなので体育座りしてお腹と太ももの間に入れてあげると、またトロンとなっていた。

しばらくお互いにジッと見つめあっていた（ちなみに私が見ていた理由は、猫つてぬれてる姿はまぬけだから面白い）けど、猫はフツと顔をそらし私の首に付いた水滴を舐めてきた。

「やつ！猫っ舌痛い！」猫の舌はザリザリする。

すると猫はシヨボンと頂垂れ、でも気持ち良さそうに私の肩や胸に身体を預けてきた。

これからはたまにお風呂へ入れてあげるね」と話しながらあることに気付いた。

「にゃんこ様、お名前なんにしましょう。男の子だから強い名前がいいよね」

「なっ。にゃうん」

そう、猫はどうやらオスだった。洗っている時に「あ、男の子なんだね」というと、なぜかカチン、と猫は固まってしまった。

うーん・・・ファラオ、権兵衛、バンジー、ポン吉、ヘラクレス・・・色々と男の子っぽい名前をあげたけど、この猫にはどんな名前も合わない気がした。

漆黒の毛並みに月と黄金を合わせたような色の強い瞳、歩く姿だって猫のくせに何者にもとらわれない品格を携えてるように感じる。

「ダメだ！決まらない！こうなったらもうあなたの名前は」かまぼこ”ね！」

真由子のネーミングセンスが爆発した瞬間だった。



綺麗にならない？（後書き）

真由子は出会いの思い出の品を名前にしました。まだ全然R15じゃない・・・。ちなみにうちの実家の猫は拾った場所の名前をいじりました。

読んで下さる方がいらっしやるみたいで嬉しいです（\*^^\*）飛び跳ねました（事実）

まだまだお付き合いいただければ励みになります。ありがとうございます。

## それぞれの存在

静かな薄暗い部屋に何かを叩く音が響いていた。1人の若い男が眉間にしわを寄せ書類を手にしていたところ、扉の向こうからバタバタと音がしてきた。さらにしわを深めた瞬間、バンツッ！という騒々しい音と共に白髪まじりの小太りの男が転がり込んできた。

「夜分遅くに申し訳ございません！なにぶん急なことで……」

「ああ挨拶はいい。で、ギル、どうだったんだ？」

コツコツと机を叩いていた指を止め、両手を組み顎をのせ目線を向けた。ギルと呼ばれた男はまだ興奮した様子であったが、息をととのえつつゆっくりと話し始めた。

「やはり殿下の仰る通り、扉で異界へ行っただと思われます。扉はまだエリック様の部屋にあることはあるのですがエリック様しか通れないようになっていまして、魔術研究員も右往左往している状態です。しかしまさか創り出すのではなく、クローゼットの扉にあんな高度な異界渡りをかけるとは思ってもいませんでした」

「そうか。いつもすまないな。エリックが迷惑をかけていつもいつも自分を悩ます存在に頭を抱えなくなった。」

「とんでもない。エリック様はまだ12歳ですし若い頃は何にでも

挑戦してみたくなるものです。私もはるか昔研究長になるまでは無茶ばかりしましたよ。まあ今回の件は度が過ぎますが・・・それにあなたち兄弟の迷惑を数えていたら指が何本あっても足りませぬぞ？オルベルト殿下」

ギルはニヤリと笑い反対にオルベルトは苦虫をつぶしたような顔になった。今では執務室の机に座って雑務をこなすが、昔はずいぶん”やんちゃ”をしていた。

「この件は俺が直接解決しよう。扉を通らずとも血がつながっていればたぶんどうにかなるだろう」

オルベルトは重い腰を上げ、ギルとともに弟のエリックの部屋へと向かった。

――――

真由子は以前から、あるプロジェクトの企画チームに参加していた。チームの筆頭は名川部長であり、真由子はこのプロジェクトのために仕事をしつつ語学の勉強や資格取得など並々ならぬ努力をしてきた。

そのプロジェクトとは「貿易会社でありながら、貿易関連会社にフェアトレードを推奨する国際プロジェクト」だ。フェアトレードとは、途上国の生産者に公正な賃金や労働条件を保証した価格で商品を購入することで、途上国の自立や環境保全を支援すること。

もともと、不正貿易などの見直しについてのプロジェクトに関わりたいと昔から望んでいた。今その一步を踏み出せるかもしれない、と強く感じているのだ。

「片岡すげえな、その歳で抜擢かよ！」「真由子先輩すごいですっ！」

何人かはそう声をかけてくれたので私は「ありがとう。企画コンペとか頑張ったかいがあつたわあ」とか「調査に協力してくれたおかげだよ」と喜びを素直に受け止めた。

その一方で嫉妬による理不尽な誹謗中傷を受けることもある。でも私は毅然としていた。常に飄々としていたし、負けたくもなかった。

しかし最近、「片岡真由子は上司たちを誘惑しプロジェクトチームへ入った」という噂が流れたため、現在はチームメンバーと共に社長室にいる。

「片岡さんは正義感が強くそんなことをする子じゃない」

「ひがんだ奴らがそんな噂を流しているだけです」

などと、部長や先輩たちが必死に言っているので私は不覚にも泣き



そうになった。

そうなのだ、話が飛び火しすぎたのだ。一緒にプロジェクトを行う他企業などへの我が社の信用が失われてしまう可能性が出てくるまでに肥大してしまった。

私はプロジェクトを抜けバックアップにあたることを決めた。

みんな必死に引き止めてくれた。だけど自分だけが侮辱を受けるならいいけど、我が社のイメージダウンになったりお世話になっている上司や、なにより厳しくも優しい名川部長に迷惑をかけたくなかった。それにまた次の機会もやってくるかもしれないからその時を待とうと思った。

噂で人間の信頼関係や家族が壊れたりすることが多くあることを真由子は知っていた……………

「かまぼこーただいま」

”ぼふん！”

ん？ぼふん？？大きくて不思議な音が居間から聞こえたような？まさかかまぼこのお、おなら・・・？など考えていると、

「ニャうん！」

かまぼこはトトツと軽く足音をたて玄関まで迎えにきてくれた。拾ってきてからもう3日間一緒に生活しているが、この噂で気がめいりそうになってもかまぼこがいたからどうにかやっていけた。

「んにゅうう？」

何だか泣きたい気持ちになり浮上出来ないまでに気分が沈みそうになっただけなら、下から心配そうな、そして何か心の奥深いところまで見透かしたように見つめてくる視線が絡みついていた。側にいてくれてありがとう、かまぼこ。

「いい子にしていた？今日の夕ご飯はおでんだよ。たまご、ちくわ、大根、あ、かまぼこも入れるよ。鶏肉もいれるから、最後は鶏肉の和風リゾットでね」

かまぼこが好物なかまぼこは、しっぽをピン！とたてにやうにやう鳴きながら脚に擦り寄ってきた。まるで言葉がわかってるみたいでなんだか笑えてくる。

人に話したり泣くことが得意じゃない私は、行き場のない怒りと悲しみを心に閉じ込めた。



## それぞれの存在（後書き）

理不尽なことは誰しもが直面すると思います。その中で、何を考え誰を相手にどんな方法で戦っていけるかで人間は大きくも小さくなるような気がします。

私は小さくなってる気がしますね。ポーン

携帯で読まれている方が多くいますので前書きは書かないことにしました。読みやすいかな、と思って（^^;）

今回は説明的ですみません。次回はふんだんに面白くしようと思っています！また次回もよろしくお願いします。

## 拾った成猫

猫を拾って6日目――

プロジェクトを降りバックアップにまわったことで会社での風当たりはすぐに弱まった。最近ちゃんとご飯も食べていたので胸もDカップへ戻った。ちなみに私は太ると上半身（主に胸）に肉がつくという体質だからいつもDかEカップだ。

書類と格闘し終えべっ甲のバレッタで一つに束ねていた髪をきれいに直した時、後輩が声をかけてきた。

「先輩！お昼ご飯行きましょー」

明るくてお仕事頑張る後輩の美佳ちゃん、オフィスではお財布振り回すのはやめましよう……。ほら課長がジトツと睨んでるわよ？

近くのイタリア風バーで生ハムとルッコラのパニーニとオレングジュース、美佳ちゃんはベーコンとほうれん草のキッシュとアツプルサイダーを注文し席に座った。

私がプロジェクトへ決まった際と辞退した際に、びっくりするほど喜んで、そして怒り悲しんでくれた。少し茶色の肩までのボブとプニツとしたほっぺたがかわいい、人の気持ちを思いやれる本当に優しい子だ。

「先輩が完全にプロジェクトから抜けなかったんで、翻訳が必要なものや案の構想のまとめが早く出来そうだって斉藤先輩が言ってま

したよ。しっかし真由子先輩を叩いてたやつらホントにムカつきますね！今では素知らぬ顔じゃないですか！？あんだけ書類にハンコ押し渋ってたり必要な時にわざといなかったりして真由子先輩の伝達ミスのせいにしてたりしてたのに！」

美佳がキツシュをぱくぱく頬張りながらキーキー言ってるのを見て、真由子は密かにハムスターみたいだと思った。

「いいよ、もう。そんなことがあつて仕事にスムーズにいかなくなったら大変なもの。このプロジェクトは集中的に行うから一つの案にあまり時間がかけられないからね。」

「う、そうですね」

「それより、斉藤先輩とはどうなの？ご飯くらい誘えばいいじゃない」

そう、美佳ちゃんはプロジェクトに加わる営業部の斉藤先輩に恋をしている。そして斉藤先輩もまんざらじゃないみたいなのだ。企画部へ来た際にチラッと美佳ちゃんを見ているのを私は密かに知っている。こういう時、いいなあ恋愛って・・・って思う。落ち着いた先輩がキーキー言う美佳ちゃんをなだめている所を想像するとププと笑ってしまう。

お互いを思いやれるなんてすごく素敵なことだと思う。

突然しどろもどろになる後輩との楽しい食事を終え、またパソコンにかじりついた。今日中にエクセルで途上国数ヶ国と主要な日本

企業の貿易グラフを作らなきゃ。

出来ることをやる。機会はまたやってくる。そう信じていなきゃ  
．．．．悔しくて泣きそうなもの。

アパート近くの小道で、私は立ち止まっていた。暗闇でよくわからないがベージュのような色の猫が横たわっている。かまぼこよりもだいぶ大きいから成猫だと思う。

「猫、大丈夫．．．？」

死んでるんじゃないかと恐る恐る声を掛けるとうつすら目を開き「みゃう．．．」と弱々しげに鳴いた。こりゃ危ないと私は猫を抱きかかえ家へ急いだ。

「かまぼこただいま！猫拾っちゃった」

ドアを開け、居間へ入り猫を新聞紙の上に横たえさせた。するとおかえりーと小走りでやってきたかまぼこが猫を見て「みぎゃっ！にゃう！んにゃうう」と鳴き出し猫をたたき始めた。目を開けた猫にホッと安心したようにかまぼこはソファへ飛び乗った。

私はとりあえずご飯だと思い、ミルク粥とかまぼこ用に買った栄養剤をスプーンで与えた。私はあとでご飯食べよう。

「だいぶ動けるようになったわね。かまぼこと知り合い？なんだか目が恐いけど」

「ご飯を食べ力が出たのか猫はさっきからジーーツとかまぼこを睨みたまににやあにやあ言っていた。かまぼこはソファに寝そべりしっぽをユラユラ余裕の表情だ。子猫なのにふてぶてしい。」

拾ってきた成猫は明るい場所で見ると驚くべき美猫だった。シャパンゴールドのような毛色で、瞳は濃い紫色だった。こんな毛色の猫いたっけ？と思いつつもかまぼことおなじく気品あふれる猫には違いなかった。

「さて、少し汚れてるからお風呂に入ろうか？かまぼこはゆっくりしててね」

「にや？」

猫はいきなり抱えられ驚いたようで、手足をバタバタさせていた。

まぼこは「うにやうにゃん、なふっ、んにゃア」など奇声をあげていた。まるでニヤニヤと笑っているように見える。



そして先に猫を浴槽近くへ放り（まだ若干暴れている）、服を脱いでガラス戸を開けた。

すると浴槽を眺めていた猫は振り返り……………

「みゃ……………みゃ!？」

ぴょーん!

カシカシッ!

鳴いて飛んで床を蹴るといふ、全く同じ反応に笑ってしまった。しかし猫なのに裸を見て飛び上がるなんてかわいい。

「さあ汚れたところを洗ってあげましょうかね」

かまぼこの時のように、床にぺたんと足をつけ暴れる猫をガツと膝のところでおさえた。「フーフツ」言ってるけど気にしない。いい子だからひつかいてはこないみたいだし。猫は私に背を向けてお座りして観念したように静かに石鹸で洗われている。たまに「……………んにゃ」など聞こえてくるから気持ちいいんだろう。どうだ私のテクは。

少しするとかまぼこがガラス戸の前に来ていた。なので逃げようとする猫を押さえかまぼこを浴室へ入れた。まだニヤニヤしているようだ。気品があるのに……………。猫はさつきよりも激しく「フーフツ」と鳴きかまぼこを威嚇し始めた。

そして猫をひっくりがえし向かい合わせにした瞬間、やはりちょっと驚き視線をうろつろとさまよわせていた。猫に私のDカップの柔らかくて形もいい美乳を見られてもなんともないのかな？と思いつつ、猫を持ち上げた。

「あ、君も男の子なんだね」

そしてやつぱり……ぱっちり目を見開きチロリと少しだけ舌を出してカチンと固まった。

「ウにゃんにゅ、うにゃにゃにゃウ」

かまぼこ、その鳴き声気持ち悪い。言っとくけどあんたも同じ反応だったんだけど……と心の奥で呟いた。

## 拾った成猫（後書き）

この猫の名前は何になるのかはもう決めています。

ご覧になった方も多くいると思いますが、かまぼことのお風呂を詳しく書いた話を「活動報告」のお礼小話のところにおいています。よかったらぜひ

（あ、ストーリー的には読まなくても全然問題はないです）

## 甘えん坊とクール系

笑う不気味な子猫を尻目に、大人しくなった猫を洗い始めた。このにゃんこ様の名前なんにしようかな。この綺麗な毛色だからなあ。なんかゴージャスな名前がいいよね。

泡でわしゃわしゃしつつ考えていると突然ひらめいた。

「社長っ！あなたの名前は社長だよー将来出世しそうな感じ。かまぼこと仲良くね？」

シャンパンゴールドの毛色と長いしっぽ、何だか動きも気品あふれる堂々とした感じ、知的な紫の目。イメージはIT企業のやり手の若い社長だ。

2匹の猫はきょとんとしていたが、何度も「君は社長」と言っていると理解したようだ。賢い猫たちだな。

最後に手足の泡を落とす際に、膝の間で挟まっていた社長のお腹を左手で抱き寄せた。すると身体が少し固くなった。ん？胸が当たった気がしたけど嫌だったのかな？目に水でも入ったのかな？なかまぼこはまた不気味に「うにやうにや」言い始めたんだろ？

それから2匹の猫を浴槽のふちに座らせ素早く髪や身体などを洗って、浴槽に浸かり社長を体育座りした膝の上に乗せた。こつちを向けたときちらりと顔や胸を見た後は私の後ろや天井辺りに視線をさまよわせている。

「んにゅう、みゃうつ」

かまぼこはお湯をはった洗面器の中でのんびりしていたが、手で水をパチャパチャさせどうやらかまっでほしい様子。もうどうにでもしろという感じの社長を今度は洗面器の中に入れ、かまぼこを抱えた。

てしっ、ペチっ、ぷにゅ、むにむに……

「あっ、かま……ぼこッ、もーまた。いつもいつもやめなさいっ」

最近、甘えん坊にゃんこは私のお腹や胸をむにむにするのがお気に入りらしい。それにお風呂に入れるのは今日で2度目だけど、ご飯を食べた後や一緒にベッドで寝る時はいつもくっついてくる。こんな小さな子猫が外に1匹だけっていうことはどう考えてもネグレクトだとは思えない。寂しいんだろうな。

だからって直に胸を執拗に触られたり顔を谷間に埋め動かされると妙な気持ちになるからやめてほしいけど。決してそんなプレイじゃない！と心の中でつつこんでみる。

ふと社長を見ると驚いたようにかまぼこ（と胸）を見ていて、目が合うとすぐに逸らした。何だろう？

ー＊ー＊ー＊ー

ふうさっぱり。今日は金曜日。土日は休みでゆっくりできるから夕食の餃子を作る。社長のことで後回しにしちゃったしね。

餃子は焼いて冷凍したり水餃子にしたり揚げ餃子など色々出来るから便利料理だと思う。材料はひき肉とニラと春キャベツ、にんにくとしょうが。醤油と塩こしょうと酒で味付け。

猫用に水餃子を作ろうと思うから、ニラなどは省いたのも作る。

フライパンからガジガジ焼けてくる音が聞こえてきた。さっきから2匹が興味深そうに見ている。蓋を開けると水蒸気と匂いの強さに驚いていたようだ。

白いほかほかのごはんと卵と小松菜の中華風スープ、それと焼き餃子はポン酢で食べる。

2匹には薄味の水餃子を小さく刻んだもの。かまぼこはまだあまり食べれないみたいだからミルク中心。

「いただきます。なんかいいね、みんなでご飯食べるのって」

「にゃう！」

「.....」

クールな感じだしわがままなのかな、と思ってたけどちゃんと社長も食べてくれた。何だか食べ方がたどしいけど、今までどうやってごはん食べてたんだろ？首輪もないから野良だと思うし自分で獲物捕まえてたりしてたんだろ。あんなに品がいいのにたくましいなあ。

あっという間に食べ終えた私たちは食後の1杯を楽しんでいた。今日は爽やかなダージリンのストレートティー。かまぼこはソファ

に座ってる私の膝の上で喉を鳴らし寝そべっていて、社長はラゲに寝そべりこつちを見ている。

ここ数ヶ月は仕事関係で土日も心のゆとりがなかったから、プロジェクトから抜けて正解だったのかもどとぼとぼと考えてはいけな事を考えてしまった。プロジェクトに入ったら入ったで嫌がらせじみたことをしてくるいい歳した大人たちを情けなく思い、ストレスは増えてリラックスなんて出来なかったなあ。

何だかまたウルツときてしまった。

「ダメな人も多くいるよね。せつかくやりたいプロジェクトに入れたのに若すぎ、何より女だからってさ。生まれで差別するってのはどうなの。変えられるものじゃないじゃないよねえ？それに努力してない訳なんてないのに」

「うにゅううう」

「.....」

それから少し仕事の愚痴を聞かせてしまった。

「ごめんねこんな話。かまぼこ、社長、この土日は思いっきりのんびりしようねー美味しいものいっぱい作っただげるね」

「なう」

「.....」

慰めてくれたり話を聞いてくれたりしてるみたいでなぜか安心で

きた。

そんなこんなで金曜日の夜はゆっくりと静かに更けていった。

ーおまけー

ちなみに今夜はいつも胸に顔を埋めて眠るかまぼこが枕横でさつさと丸まった。ベット横にいる私とソファでうとうとしている社長を見つめてくるってことは今夜は社長を抱っこしろという事らしい。サムズアップ！僕の代わりに優しくしてやって？とは優しい子猫だ。

逃げようとする社長を捕まえると、最初は「にやうーうー！」などもがいていたが「野良は大変だったよね？今夜は甘えていいんだよ」と、胸にむぎゅっと押し付けて背中や喉を優しくなでているとやがて大人しくなった。

なので今夜は（嫌がる）社長を（無理矢理）胸に抱っこして眠った。



## 甘えん坊とクール系（後書き）

動物と一緒に寝るとあったかくてすぐ眠くなっちゃうんですね。

しかしムツツリだよなあ社長。きっとお風呂のむにむに事件も人間  
だったらなんとも言えないことになってたんじゃないかと．．．．．

また更新出来るように頑張ります（＾＾）

## 土曜日（前編）

もぞっ、もぞもぞっ

なんだかさつきから首元がむずむずする。久しぶりに心身共にリラックスして惰眠を貪っていた真由子は恐る恐る目を開いた。すると、

「．．．．．すぴッ」

「！」

横向きで寝ていた私のパジャマの中で社長が眠っていた。首にさりりとした毛があたり鼻息はなんとも愛らしいと思いつつも、よほど疲れたのか一向に目を覚まさない。てゆうかなんでパジャマの中？下から潜り込んだ？それにしても上のボタンが2つはずれてるしなどボーっと考えていると、

「んにゅふっ」

私に腕枕をされているかまぼこは起きていてまたニヤニヤ笑っている。毛並み柔らかか黒猫さんの気品が．．．

いつからしてるかわかんないけど2匹の猫を腕枕してるような状態で手が疲れてきたし、そろそろ11時になるし起きようとしたところ、社長がハッと目を覚ました。

「フギヤ！」

「痛っ！いたた、社長落ちて着いて！」

ビックリした社長がガリッと首に爪を立ててきた。まだ混乱して

パジャマの中でもがいている。てててててっ！と手足のパンチをくらいお腹や胸が痛い。これは首元に引っ掻き傷ができただろうなあ……

社長はかまぼこの「にゃうん」という一言でピタッと止まりそちらを睨んだ。そしてパジャマの首もと部分からするりと出て行き振り返り、申し訳なさそうに目を伏せ首の傷をひと舐めた。少し痛んだけど、その後傷の部分がジワリと温かく感じた。

「？」

なんで温かいんだろ？

「……………」

「まあいいか。ありがと社長さん」

「……………うなん」

ベッドから降りてソファへ向かう優雅な猫にお礼を言うとそっけないけど返事はちゃんと返って来た。

にゃむにゃむ言いながらててつとそれに付いて行く黒猫を尻目に鏡で首をチェックしてみると血が出てたと思ったけど赤くもなっていない。

寝起きの真由子は猫マジックだと信じて洗濯物や観葉植物に水やりをした。

さて、今日はランチだ。餃子の皮と林檎があるのでアレを作る

うとしたところバターがなかった。猫に留守番を頼み財布を持ってコンビニへ向かう。

「ただいまー」

ぼんぼん！

なんだなんだ？2匹そろって、おなら・・・？

いやいやそんな、と考えてるとかまぼこが「にやうん」とお出迎え。くー！しつぽをピンとして擦り寄ってくるなんて愛いやつめ。居間では不機嫌そうな猫がソファに寝そべりしつぽをバシバシ揺らしてこつちを見ていた。か、貫禄が・・・

まず林檎を小さく切りバターと砂糖で煮詰める。少しとろみが出てくるまでじっくりと。そして最後に火を止めシナモンを入れ混ぜる。いい香りがキッチンに漂い、猫2匹がキッチンにあるテーブルの上でお座りして興味深げに観察してきた。

そして残った餃子の皮に包んで、油で揚げると・・・アップルパイの出来上がり！！簡単なんだよねー

これにダッツのバニラアイスをトッピングしてコーヒーを飲む。

猫用にも小さいやつを作った。シナモンは香辛料だからいいのかわかんないけど試しに少しだけ入れたらとても好評みたい。

2匹とも匂いを嗅いだあと、ぱりぱりハグハグしながら食べミル  
クを飲み、かまぼこはかわりの催促の、鼻で皿をこっちに向けて  
きて上目遣いで小首をかしげて「にゃあ」、を實行してきた。

社長はズイッと皿を手で差し出すだけだったけどそのふてぶてし  
さが最高にかわかった。

人間は動物の誘惑に弱いだめな動物だよね。うん。

お腹いっぱいになってソファでごろ寝。かまぼこは仰向けになっ  
た私のお腹の上でごろごろしている。ごろごろするっていう言葉の  
ごろごろって、寝る子の猫のゴロゴロとなる喉の音だと思うなあ。

社長はベランダに出て外を見つつなにか考えている様子。2階だ  
けど落ちないか心配だ。よっと起き上がりかまぼこをソファに乗せ、  
社長を赤ちゃんを抱くよう横向きに抱っこした。

相変わらず無言でクールなにゃんだ。

「外に出たい？でもダメだよー。ここは車が多いから危ないから・・・  
ごめんね。我慢してね」

チュっ

「！」

社長にキスするとビックリされた。両手としっぽがピツと固まる。

「ウにやう！んにゆう！」

なぜか足下に走ってきたかまぼこが抗議しているように鳴いている。なので目を泳がせている社長をおろし、かまぼこを抱っこして「いつもお迎えありがと」と、チュッとキスしたらたいそう喜んでようだった。

のんびりとした午後の春の風ががまるで私たちを包むように吹いていた。

## 土曜日（前編）（後書き）

あのアップルパイはよく作ります。ラクチンです\*

あ、活動報告のところに小話書きましたのでよければぜひまた見て下さい。お題は「電子レンジ!」です!

## 土曜日（後編）

昼の陽気が嘘のように夕方から曇が空を覆い小雨が降ってきた。風も強くなり慌ててベランダにある洗濯物を取り込んだ。

春の雨はなんだ恐い。

今日の夕ご飯はフキご飯とカブと油揚げのお味噌汁だった。

灰汁抜きしたフキの小口切りに炒り卵と胡麻、そして少し塩を炊きたてのご飯混ぜて食べるだけで料亭の和食の味になる。フキの若草色と卵の黄色、そして白いご飯の対比もまた楽しめる、と母が春になるといつも作ってくれていた定番まぜご飯だ。

しばらく実家には戻ってないが私は「必要のない存在」だから別に帰らない。自分の仕事をしてしっかり自立していれば干渉されない。んーラクチンだ。

猫たちにはご飯と炒り卵と胡麻、そしてお味噌汁を混ぜたねこまんまをあげた。かまぼこはミルクより私が作ったご飯が食べたいらしく、社長と共にいつも珍しそうにご飯を見たあとパクパクと食べている。灰汁や苦みがあるからあげないでいたフキにも興味があるらしく一つだけあげたら小首を傾げて「にゃん」攻撃がきた。片岡真由子、撃沈……



そんなこんな幸せな土曜の夕食、そしてのんびりお風呂に入った。かまぼこはいつも私がお風呂に入っているときそうするように、ガラス戸の前でお座りしていた。どうやら社長も近くにいて何やらにやーにやー言い合っていた。毛色などからして親子じゃないとは思っけど2匹はやっぱり知り合いなんじゃないかな、と思う。

「んにゅうー」

風呂上がりにつくりとテレビを観ながら、寝言を言っているかまぼこを膝に抱え撫でていると社長は不機嫌な目で私やかまぼこを見ている。

社長はいつもかまぼこや時には私をも睨みつけている。猫の性格も色々あると思うから特に気にしないけど、私を見るときたまに何かを見透かされている気になる。春の雨みたいな存在だ。

午後10時をまわった頃、突然チャイムが鳴った。その音に驚いたかまぼこ社長はピッ！としっぱを伸ばした。

誰だろ？こんな夜更けにアポなしなんてきつと大学からの友人2人のうちどちらかだろう。彼らは本当にたまにだがいきなり私のご飯が食べたいだの彼氏と喧嘩しただの上司の愚痴などを言いにくる。

お菓子やワインや生ハムなどを持ち合ったりとこれがなかなか楽しい女子会なのだ。

「はい」

何の気なしに返事をしインターフォン画面を見て息をのんだ。

「真由子ごめん、突然来て」

一瞬ビククリして声が出なかった。前へ進めないでいる原因の男が突然現れたのだから……

「英臣、どうしたの？こんな夜更けに」

慌てて動揺を隠し普段通りに笑顔に戻った。だって今は友達だもの。私ってホントかわいくない性格だなあとツツコミさえ入れる。

「ちょっと相談したい事があるんだけど今いい？」

「今？ちょっとあんた彼女いるのにこんな時間に女のとこにきて信用なくすよ？相談事なら駅前のスタバで少し待ってて。すぐ行く」

英臣は腑に落ちない、何か言いたげな顔をしたが「わかった。スタバでな」と言い画面から消えた。

「なう、うにゃあ？」

トトトツと居間のドア近くにいた私のとこに駆け寄ってきて下か

ら覗き見てくるかまぼこは、まるで「アイツ誰？大丈夫？」と心配してくれているようだった。社長はラグの上に座ってこっちをジッと見ている。

とりあえず薄く化粧をしパジャマからジーンズとベージュのセーターに着替え財布と携帯を持った。

「ちょっと出かけてくるからお留守番お願いね。すぐ戻ってくるから」

そう言って群青色のカーディガンを羽織って扉を閉めた。

――――

「ごめんなこんな遅くに。前にアパート変わってないって言ってたからさ」

昨年、大学時代の仲のいい友達と飲みに行って以来なので約8ヶ月ぶりだ。ヘッドハンティングにより東京に戻ってきてから1ヶ月経ったはずだ。

「いいよ、なんかあったんでしょ？彼女と仲直りできた？会社首にでもなった？まあチーズケーキと熱いアメリカノをトールでお願いしてくれたら許してあげる」

英臣は「あいかわらず太らないからってよく食べるな」と苦笑いしつつもソファから腰を上げ買ってきてくれた。その後、英臣の新

しい職場の話や結婚する友人の話などを楽しんだ。

「まさか中村君がねーでも菅原さんと何だかんだ言いつつラブラブだったもんね。やっとな結婚かぁ」

共通の友人である中村君は、大学時代に他大学のマドンナの菅原さんを映画や食事に何度も誘いアプローチを初めて1年半後にようやくお付き合いを始めた。

私たちと中村君は映画サークルに入っていて、その集まりの関係で菅原さんに一目惚れしたそう。あの頃の私はロマンチックだなんだと騒いでいた。まあ今でもそう思うけどね。

手に持つカプチーノを揺らし一口する、そんな姿も絵になるなあと観察していた。英臣は177cmで中肉中背で、少し茶色がかった黒髪にしっかりと人を見据える強い目の持ち主で大学でも結構モテていた部類だ。

「で？お前の仕事の調子はどう？」

「んーまあまあかな。以前メールで教えたプロジェクトあるでしょ。それに関われるようになったしね」

ギクリとした。プロジェクトメンバーに選ばれ自ら辞退したなんて言いたくなかった。せめてものプライドだった。なんのためのプライドなのかわからなかったけど、弱い所なんて今更言いたくなかった。まだ話してないけど、きっと彼女とうまくいってないことについて相談してくると感じていた。私に相談してくる理由は「真由子は俺の性格を知ってて感覚も合うしズバツと言ってくれるからい

い」だそう。

そりゃ性格は合うし恋愛感情があったから付き合っただからそうなのかもしれない。

「どんな仕事に関わってもなかなか難しいよー。でも名川部長もいるしね」

「出た、部長！飲み会でもその名川部長って人のこと尊敬してるだのお父さんみたいだの言ってただろー。．．．なあ、お前今いい奴いないのか？」

「どうでもいいでしょー。まあ悩んだら理解不能な男心についてとか相談するわ。今は仕事忙しいし。それにしても彼女との些細なケンカでもして相談しにくるなんて何があったの？」

「空気がすこし変わったような気がした。なにか探るような感じが。早く空気を变えたくてさっさと相談を聞いてこのお茶会を終わらせようとチーズケーキの残りを口に放り込んだ。」

「あーまあ。彼女とは別れた。名古屋と東京じゃあやっぱり距離がありすぎてダメだった。フラれたよ」

「え？」

「ちょっと前に喧嘩したからとメールで相談して来て、解決策や女心やらをアドバイスした。今回はわざわざ会いに（しかにアポなし自宅に）くるぐらいだから、ケンカが悪化したから話を聞いてほしいのかケンカ解決の為に」と聞きたい事があったのだと思ってい

た。まさか「別れた」って……

「だからお前と飲みたくなつて……ダメか？」

私は絶句してしまつた。別れた女のとこにこんな時間にくるなんかろくな理由じゃない。

そうだよ。こいつは勉強も仕事もできてしっかりしてる。人前では寂しさや怒りなどさもないように振る舞う。でも、根本的な部分は寂しがり。

……私と似ている。だからウマが合つた。だから付き合つたにすぎないのだろう。そして英臣の仕事の都合で遠距離になつて別れた。なのにまた相手の都合で振り回されようとしている。私たちはウマがあうし友達として深く付き合つてきたから、3ヶ月間の恋人期間にも特にケンカというケンカもしたことがなかった。

「だから、だから私のとこに来たの？話を聞いてほしくて？……  
・身体で慰めてほしくて？」

「ズバツと言うなー。でもそういうことなんだ……よかつたら付き合わないか、また。やっぱり真由子という方がいいと思える時があつて」

私は底辺に残るアメリカノのマグを握りしめた。

きつと私だけが好きだつたんだ。今日初めて分かつた。それと同

時に何年もしこりになって忘れられなかったのは、何年も大好きでこの瞬間を待ってたのだと気付いた。でもなんか違う。

「帰る．．．．．コーヒーありがと」

席を立とうとしたところ左腕を掴まれた。

「待てよ、どうした？」

どうしたって言われても私はいつものように笑えないぐらいに動揺していた。またソファに座りながら俯きマグを両手で掴む。

「ごめん、やっぱりちよつと無理。今気になってる人いるから」

嘘を言っでも逃げたかった。冷静になりたかった。

「．．．．．気になってるって会社の奴か？」

「そう。会社関係の人。もー関係ないでしょ。また何かあれば教えるよ」

「まあそうだけどな．．．．．」

がしがしと頭をかき何かをつぶやいてる。どうやら私を誘えば「うん」と言うと思ってたんだろうか。私の存在ってこの人にとって何なんだろ。気の合う友達なのかそういう関係にちよつどいい存在なのか。

私が男だったらよかった。

そうすればこんなにこの人相手に悩まずに住んだのに。そうすれ

ば仕事でも認められたのに。そうすれば会社でもあんな惨めな思い  
しなくてすんだのに。．．．．．そうすれば家でも居場所があつ  
たのに．．．．．

気まずい沈黙の中何も言えず俯いているとカツカツと足音がした。  
フツと影がさし上を見ると、グレーのスーツを着た男が立って私を  
見下ろしていた。見つめているとさらにジツと見つめてくる。こん  
なに意志の強そうな濃い紫の瞳と耳までかかったさりとした金髪  
の男の知り合いは私にはいない。美形だなーと思っていると記憶に  
残るような低い声で静かに名前を呼ばれた。

「真由子。迎えに来た。帰るぞ」

は?????

「え？真由子、なに？付き合ってる人いたのか？帰るってまさか一  
緒に住んでるのか？」

ソファに座ったままの英臣は訳が分からないと混乱しているよう  
だった。自分のマグを持ってゆっくりと私と金髪男を交互に見てい  
た。

「ああそうだ。真由子は返してもらっ」

男はチラリと英臣を見たが、何も言えずポカンとしている私の腰



を掴みまるでエスコートするようにスタバを後にした。最後に見た英臣もあっけにとられているようだった。

次から次へと湧いてくる色んな出来事によくわからず混乱したままの私は……気が失うという最高の逃げ道を選択してしまった。

土曜日（後編）（後書き）

女より男の方が恋愛を引きずるといいますが、真由子は引きずるみたいです。結構女性でもそういう人は多いんじゃないかな・・・と思います。

金髪男は誰なのでしょう。ってもちろんあの人です、あの人。

開けこま！

綺麗で不思議な夢を見た。

人魚が青い海の中で気持ち良さそうに泳いでいた。尾びれは薄いピンクなのだが光の加減によっては白銀にもとれる。胸は白い真珠の殻で隠されていて、脚まではあるであろう長い黒髪は身体にするりと巻き付いたり水中に漂ったりしていた。

神秘的すぎて言葉がでなかった。

しかしその人魚と目があった。彼女はにっこりと微笑み口をパクパクさせて何か言っているようだった。けれど口からは泡しか出ず水中にダイヤモンドが散っているようにみえた。

――――

「なっ！ みゃあなううう」

「にゃう」

「んにゃあああ、なうんっ」

「なう」

「みゃうん、にゃー」

何やら聞こえてきたのは猫2匹の声。私はハッと目を覚ました。

天井をみると部屋の天井と電球が見えたのでうちの家だと起き上がろうとした。するとそれに気付いたかまぼこがタツクルを仕掛けて来た。

「にゃあああ！」

ぼふっ

布団に着地し顔を覗き込んでくる。心配してたんだよ、と揺れる瞳で訴えて来た。さっきの英臣との出来事を思い出し、かまぼこをぎゅっと抱きしめた。

「ありがとかまぼこ」

猫に心配されるってどんだけダメな人間なんだ……と、軽く落ち込んだ。

私は思い出したようにさっきの金髪の外国人っぽい男の人に考えをめぐらせた。あの人が私をうちに送ってくれたってことだ。保険証や免許証の住所でも見て運んでくれたんだろうか……。慌てて財布を確かめるとちゃんとお金もなにもかも盗られていないようだった。いい人で良かった！見ず知らずの人の前で意識をなくすなんてヘタしたら犯罪にまき込まれてたかもしれない。

金髪に紫の瞳、近寄り難く誰しもを従えるオーラを纏っていたあの金髪男は誰なんだろう。少し社長と似てるな。高貴な感じとか……

そこで思わず冗談で言ってしまった。この一言が自分の人生を変えてしまうと知らずに。

「社長ー！さっきのは社長でしょ？あの時私、少しテンパってたんだ。ありがとう」

猫2匹がピクツと動き両者は一瞬アイコンタクトをとったようにみえた。私は特に気にもせずかまぼこを撫で続け「さっき社長がねー」と話していると社長がいたラグの方から声がした。

「ほらみる。お前が助けに行けなんて言うからだ」

え？

「だって真由子さんが困つてるとこなんて見たくなかったんだもん。それに僕みたいな子供が行くより兄様が行った方がよかったでしょう？やっぱり。あの雰囲気はちよつと僕には無理だしー」

え？

「この二重人格が……」舌打ちの音さえ聞こえた。

「ちよ、ちよつと待つて？何で猫がしゃべってるの??」

私は新たな事態に錯乱状態寸前になりながらもとりあえず冷静になろうとしたが、今度はそこでしまった、という顔をしたのは社長

だった。

「…………お前は俺に気付いたんじゃないのか？」

「気付くって、え？ただあの男が社長と同じ感じだから冗談言ってみただけなん、だけど…………？」

目の前で起こっている不可解な出来事にダラダラ汗を流しているとかまぼこがベッドから飛び降り社長の元へ行きこつちを振り返った。何だか少しだけ申し訳なさそうだけど目は爛々と輝いて喜んでいるようにもみえる。

「あーあ。真由子さんに気付かれちゃった。あのままスルーしとけばいいのに兄様が話しかけるからだよ。僕の責任じゃないからね」

「……………」

「こうなったら連れて帰るしかないよね！姿バレちゃったし」

” ぼふんぼふん！ ”

以前も聞きたいいきなり何かが弾けるような音を耳にして目を開けると、まさにさっき見かけた金髪男と私と同じくらいの身長のもう一人の黒髪金目の少年がいた。2人とも見た事のないような服装だ。金髪の男はさきほどのスーツではなくダークグレーのシャツに同色のズボンそして膝までの黒いマントを軽く羽織っていて、少年はおとぎ話の魔法使いが着るような足首までの真っ黒のマントを着ていた。金髪男の腰に

重そうに鎮座しているのは紛れもなく銀と紫の宝石みたいあのが輝く鞘に守られ凶器、長い剣ではないだろうか……

私がしげしげと見つめぶつと「かまぼこと社長？ いやいやそんな」と呟いていると、黒髪の少年が近づき少し大きな両手で私の右手を包んだ。

「ごめんね驚かせてしまつて。このことがバレたら真由子さんを僕たちの世界にすぐ連れて帰らなきゃならないんだ。じゃなきゃ真由子さんの存在がどこからもなくなってしまうんだ」

「へっ？」

まだ頭がうまく働いてないせいか声が裏返ってしまった。

「だからね、この世界で真由子さんを覚えている人間が誰もいなくなる上に真由子さん自身も跡形もなく消滅しちゃうんだ。だからすぐにこつちへ来て。ね？」

小首を傾げる可愛らしい仕草が、少年とかまぼこをダブらせた。

「真由子はもしかするとあの存在かもしれないんだ。気付いたでしょ？ 兄様も。真由子の首元のアザ」

「……まだ決まつた訳じゃないがな」

後ろの金髪男は腕を組み眉間にしわを寄せ横を向いてまるで自分に関係がないという風を吹かせていた。しかし少しだけこちらを見

たが目が会った瞬間眉間のしわをさらに深くし、パツとまた横を向いた。なんだなんだ？

まだこの事態が掴めず啞然としていると少年がにっこりと笑い、右手を顔の前にフツとかざした。その瞬間、私は急に眠気に襲われ再度暗闇へ意識を奪われてしまった。

片岡真由子（25）

最近身につけたスキルは、気絶。

猫を拾った時点で開けてはいけない扉へ一歩踏み出してしまった。



## 開けこま！（後書き）

さて、トリップしちゃいます。ようやくです。

まだまだどうなっていくか分かりませんが、猫ではなく人間になったのでラブ注入！していこうと思います。今後もしようしくお願いします。

## ムツツリと純粹（前書き）

R15かと思われます。お気をつけてください。

## ムツツリと純粹

四季があり自然が豊かで魔術が盛んなスーリアス王国――

この国は昔、同盟国との関係や領土拡大など様々な理由で無益とも言える戦争が起こり多くの国民の血を流した。

しかし現在では他国との貿易が盛んであり、また自然が豊かな国として他国からの旅行者が多く訪れる。

現在は魔術を用いた争いはあまりなく、かまどの火をつけたりなど生活の一部としての魔術のみの使用のみに限られている。もし他人に害を及ぼしたり利益を追求する者には厳しい罰則が加えられる。ほぼ国民が簡単な魔術を使えるが特に秀でた者は魔術学校で学び、卒業後は隣接されている王立魔術研究所、もしくは王立騎士団で騎士として従事する。

現国王であるリルドア・ヴァン・スーリアス陛下は他国との戦争からこの国を平定させた国民の強い支持を得ていて、陛下自身も温厚でありつつも頭の切れる人物と噂され、国民を大事にした政治を行う事を公言しまた実行している。

彼には2人の息子がいて長男は王立騎士団の第3隊長を勤め、均整のとれた体型や外見だが女に興味がなく執務に明け暮れる日々を送っていた。また、次男は愛くるしく社交的であり魔術に長けているため今後はこの国を担う一員となることが約束されている。

――

ベッドサイドに花瓶に生けてある一輪のユリの花が優しく光っていてその照明しかない薄暗く静かな一室に真由子の寝息だけが響いていた。

男は足音を忍ばせて近づきギリとベッドを軋ませ枕元に座る。仰向けになって子供のように無防備に寝ている姿に無意識に笑みがこぼれる。長い黒髪を優しく梳いていると「んっ……」と真由子はその男の手へ顔を擦り寄せた。

思わず手を引っ込めようとしたが、頬のやわらさと温かさはまだ触れていたという気持ちが勝った。親指で少しだけ開いているやわらかな紅い唇をなぞった。そして真由子の顎をクっとなつかみゆっくりと顔を寄せ、しばらくの間その柔らかい唇と逃げる小さな舌を追いかけて口内を深く貪った。ぴちゃり、ぴちゃりと部屋にはただ濡れた音と息苦しさから逃れようとする真由子の小さな声が響いていた……

「んむ……ふう」

ハッと我に返ると真由子が苦しそうに身を擦ろうとしている。思わず我を忘れていた自分に苦笑いし、まるで無意識に赤ん坊のように吸い付いてくる唇からチュっとならぬ舌を引き最後に唇をツツと撫でた。

顎を持ち上げ上を向かせ、左の首元にある薄い水色の花びらのような形をしたアザに目をやった。このアザは最初に会った時にはなかったものだ。指でアザを一撫でして立ち上がり、さらりとした黄金の髪をかきあげ静かに部屋を後にした。

―\*―\*―\*

コンコン

コンコン

少年は何度か扉を叩いたが返事がないのでゆっくりと、繊細な彫刻されている重い扉を動かした。

寝ている真由子を起こさないよう静かにベッドサイドに寄ると何だか苦しそうな顔をしているように見えるので熱がないかと確かめた後、何か嫌な夢でも見ているのだろうと思いついて少年は片手をユリの花にかざした。すると白く優しく照らす花が揺れ一瞬だけ淡く光り輝いた後に、ふわりと様々な花の香りが部屋に広がった。この香りはこの世界の貴族の間で流行っている香りだ。

「……………げ、あいつここに来たな」

香りを飛ばす前にかすかに感じた違和感は魔術がすぐれている少年だからこそ感知出来た。不快感をあらわに忌々しそうに呟いた。

「真由子さーん。また美味しいご飯作ってね？．．．．．本当に、美味しかったんだから」

そう言ってさっきまでの苦虫を噛み潰すような顔からは想像がつかないくらいに微笑み、真由子に甘えるようほお擦りをしてじゃあねーと去った。

最後の一言だけはこの広い部屋には少し寂しそうに聞こえた．．．

ー＊ー＊ー＊ー

その頃ベッドに寝ている本人は．．．．．

じつくりと焼いた餅にウハウハ言いつつ海苔を巻いて砂糖醤油を付けて食べていたところ喉に詰まらせ苦しんだり、デパ地下で買った輸入の花やハーブの香りのジャムをバゲットに付けて食べたりと、食い意地のはった夢ばかりを見ていた。

## ムツツリと純粹（後書き）

少し短くてすみません。評価が10000ptを越えました。ありがとうございます！

## 客室滞在

「じゃあ、てしっ。」

「.....。」

「んみゅー、たしったしっ」

「んんーう.....。」

「なあんツ！ででででででで」

「きゃー！痛たたっ.....。」

なかなか起きないことに不機嫌そうなかまぼこは枕元に座り頬を「秘技！連続肉キウ起きてパンチ！」を繰り返していた。予想外の起こされ方をした私はしばらくぼーっとしていたが、寝る前（正確には気絶する前）に起こった事を思い出し慌てて周囲などを見渡した。

そこには40帖はあろうかという部屋にはどっしりと重厚な木で出来たテーブルがあり、ソファやベッドカバーなどは白い布に繊細な刺繍が施されていた。シルクやベルベットなどでは.....と英国王室のようなスイートルームのような高級感あふれる場所に恐怖を感じた。

なにか異常事態だと脳内信号が鳴っている。

「夢.....？かまぼこは猫よね？？」

黒髪の少年を思い描きキョトンとしているかまぼこを見つめた後、現実逃避に羽毛布団のような白のフカフカの掛け布団を羽織るとか



まぼこが「にゃあん」と甘えて一緒に包まって来た。この甘え方はかまぼこだ．．．と考えていたその時、バサリと布団がはがれ頭上から爽やかな声が聞こえた。

「失礼します。エリック様、女性の寝室に入る時期にはまだお早いですよ」

いかにも騎士ですって感じの茶色の目の茶髪男は、”女性がいる布団をめくる”という自分がしている最低なことを棚に上げ、黒猫を親指と人差し指でつまみ上げた。

「離せよスミス！」

私がか頬をつまんで夢じゃないと確かめていると、ぼふん！という聞き慣れた音と共に黒髪の少年が現れた。やはり黒いローブを着ていて現在は首根っこを掴まれてバタバタしている。

「か、かまぼこ？」

「真由子さんおはよう。ようこそ僕らの世界へ」

かまぼこ、もといエリック君とやらにっこり話しかけられたがまだ混乱している私に、騎士っぽい人が左手を胸に当て礼をして声をかけてきた。

「おはようございます、ミス。お話の通り美しい方ですね。いまは混乱してらっしゃるようですので詳細は後ほどお話致しましょう。それより今のお姿をどうにかなされた方が．．．」

そう言われて自分の姿を改めて見ると、洗剤のCMで見かけるような真っ白のネグリジェから脚は太ももまでめくれている、V字に開いた襟ぐりからは胸がきわどい部分まであらわになっていた。

「！！！？？」

「私には目の保養なんですけどねえ」

こつちを見ながらブツブツ呟いている男と「スミス見るなよ！」と手を振り回しどうにか視界を遮ろうとしているかまぼ．．．エリック君（まだ混乱中）を見ながら服を整えつつ、色即是空！無！など考えビジネスライクモードに切り替えた。

「すいません、取り乱してしまつて。私は片岡真由子といいます。こちらはどこでしょうか？今の状況やあなた方は．．．」

「僕が話してあげるー！」

拳手をして近づいて来たが、騎士さんににまたも襟首を掴まれていた。

「とりあえず侍女を数人よびますので身支度を整えてからにしましょう」

そう言われ部屋に入って来た数人の侍女に、私は花が浮かぶお風呂で丹念に隅々まで磨かれるはめになった。入浴中に少しだけ頭の整理が出来たけど、朝のはずなのにぐったりだよ．．．

――――

ピンクのもつさりとしたドレスを着せられそうになったので、慌ててクローゼットにあるシンプルな青いワンピースを着て髪を一つに結い侍女たちから逃げた。侍女たちは残念そうにしていたので次は要注意だ。

「それでどういう事なんですか？」

現在、朝兼昼食のスコーンを食べながらこうなった経緯やこの世界のことなどの詳細を聞いた。とりあえずかまぼこはエリック君だという事はわかった。魔術の存在を聞いたし、なんといくつかの魔術を披露してくれた。マジックだと思っていたが、さすがの私も炎が部屋を包む幻覚には驚いた……

「真由子さんには魔力はあんまりないから使えないかもしれない」と言うことだが、そんなものが私にあったことに驚きだ。この話はまた後日詳しくしてくれるそう。

そしてエリック君がこの国の第2継承者ということも聞いた。しかもここはお城の中らしい。

確かにびつくりしたけど、いきなり継承権など言われてもよくわからない。ほんの数時間前までかまぼこは普通の猫だと思っていたし、魔術や魔力もないものだとして認識している世界に住んでいたからよく理解できない。何より態度を変えてほしくないというエリック君の感情の揺れが伝わって来た。

かまぼこって呼んでほしいらしいけど、殿下にはさすがにやめておこう。かまぼこって魚の練り物だもの……。しかしかまぼこ

ってこの世界にもあるのか？スミスさん曰く、どうやら輸入品であるらしい……

そういえば何か忘れているような？？まあいいか。

今、エリック君とテーブルに向かい合わせに座って食べているスコーンには木苺のジャム、ハチミツバター、ホイップ、融かしたチョコレートを付けて食べる。なんて幸せ！だっておそらく全部日本じゃバカ高い無添加天然ものなんだから。

どうやらこの世界の食料が私の世界のものと通じているらしい。チョコはチョコとして存在し、スコーンはスコーンとして存在している。和食である白米や醤油などは他国からの輸入品となるらしい。ここスーリアス王国とは西欧みたいなものだと言った。この国の言葉も通じるし文字も読めるけどこれは私の持つ魔力のおかげらしい。

私がこっちにこなければならなかった理由はやはり、煙のように消え誰の記憶にも残らなくなると言う「存在の消滅」らしい。さすがにそれは嫌だ。では記憶を消すというのはどうかと聞いたところ、記憶を消すことや意識を操ることは戦争が終わったこの世界では大罪となるんだとか。まあ確かに記憶操作などされたら可能性としてだが事実誤認や大量虐殺なんかも安易になる。

あの時のエリック君の少し申し訳なさそうな顔が浮かんた。連れてくるということはもう帰れないということらしい。

怒りを感じずにはいらなかったが、あの世界にいても自分は誰にも必要とされないと感じていたから良かったのかもしれない。英臣ともなんだかよくわからないままになったけど、この世界の話を整理しているとどうでもよくなった。いや、正確には多くの情報を得ることで無意識に思考がそっちへ向かないようにしていた。みんな誰しもパートナーがいて、そして家庭を作る。それらをとってとつもない「義務」や「労働」に思えてしまう自分は歪んでいるのだろう。

「どうかしました？」

エリック君の隣りに立つスミスさんが色々話してくれながら気遣ってくれる。

「あつ、いや、ちょっと疲れちゃって」

慌ててごまかして笑う私の得意技。

「とりあえず、あなたの身元は隠しこの客室に留まっていたいただきます」

なにか欲しいものやしたいことなどありますか？と問われ、しばらく考えたのち、

「まず、戸籍など個人の証明になるものや働く職場、住む場所の手配をお願い出来ますか。多分どこでも生きていけると思・・・」

思つので、と繋がる言葉はエリック君の叫びで遮断されてしまった。

「ダメ！！ダメだよ！僕、真由子さんがいなきや寂しい・・・」

「かまぼこ．．．」

思わず呟いてしまう。お願い！と言われギュッと抱きつかれた。まるでコアラが木から落ちないようにしているようだ。

「エリック様、真由子様が困って．．．いつ．．．！」

ぴたっとスミスさんの動きが止まった。どうしたんだろ。

「じゃあ僕の遊び相手でもいいでしょう？この国のこととか僕勉強してて詳しいからいっぱい教えてあげる。政治や経済の流通、暮らしていくなら貨幣や生活の知識も必要でしょ」

下からおねだり、まるでにゃーん！（ゴハン！）と言われているみたいでぐらついてしまうじゃないか。確かにこの国のことは学ばないと生活していけないからここに留まるのは合理的だ。

「そう言ってくれてありがとう。お言葉に甘えてこちらで学ばせてもらうね。よろしくね。かまぼこ、もといエリック君」

まるで太陽のように笑顔を向けてくる。あまりの可愛さにほお擦りして頭をなでなでいいコいいコしまった。

その頃、少し離れた所では額に少し汗が浮かんでいるスミスが「は、腹黒．．．」と息も絶え絶えに胸を押さえていた。

やっぱり何か忘れているような．．．？まあいつか！



## 客室滞在（後書き）

確実に忘れ去られた存在がいますね。  
次は出てきます！（変態ヤローが）

ありがとうございました。



## 食事会

そんなこんなで夕食時間になるまでエリック君と話をした。ここも現在春で様々な花が咲き乱れる中庭のテラスでお茶をしていた時、爆弾発言が飛んできた。

「じゃ、社長が第1継承者!？」

思わず紅茶クッキーを吹き出してしまったが護衛中のスミスさんが見ない振りをしつつそつとハンカチを差し出してくれた。申し訳ない……

「うん。僕の腹違いの兄で名前はオルベルトってゆうんだよ、オルベルト・ヴァン・スーリアス。ねえそういえばシャチョウってどういう意味なの？食べ物？」

社長の意味を教え仕事ができ偉そうな態度だったから、と言ったらピツタリだと腹を抱えて笑っていた。

分かったことは王様の側室・リリア様の子供が社ちよ、いや、オルベルト様で年齢的にも第1継承者。

そしてエリック君は正室の子で第2継承者だが国政に興味はない模様。正室のアマーディア様は身体が弱いようでよく寝ていることが多いらしいけど……本当に一夫多妻制ってあるんだ。何かショックだ。大まかな歴史や経済状況などを聞いた頃、肌寒く感じたので部屋へ戻ることになった。

エリック君は今日、目を覚ました私が不安にならないよう魔術学校を休んでくれた。用事があってこれから学校へ行くので夕食は一

緒にとれそうにないと寂しがつていた。

部屋に入ると栗毛色の侍女がミルクたっぷりの温かい紅茶を入れてくれた。

実際私はそんなにパニックや不安にもなっていない。今までどんないじめや問題も自分で解決して来たせいかどこか自分を冷めて見つめているという感じ。実感がないのかもしれない。なんでこんなに自分は強いんだろ？

「真由子様」

ハツとすると私と同じ年くらいの先ほどの侍女が、肩までのふわりパーマを揺らし微笑んでドア付近に立っていた。

「わたくし本日から真由子様の専属侍女のミリアリア・ベルと申します。オルベルト殿下から真由子様のお世話を承りました。どうかミリアと御呼び下さい」

専属侍女！さすがの私も遠慮したい。侍女なんか付いたらお風呂に1人で入れないという羞恥を再度味わうことになりそうな予感でした。それに殿下って社長じゃん。今までただの「猫」としか接してこなかったのにいきなり殿下扱いしなきゃいけないのに違和感がある。エリック君は……かまぼこだし子供だし甘えん坊だからか、なぜかあんまり違和感はなかったけど。

「あ、いえ。侍女なんて申し訳ないです。ただの一般人ですのでお気遣いなく……」

「いいえそんな！！わたくし真由子様のお世話が出来て光栄です！今朝見習い侍女が足を滑らせてしまった際、あの場にわたくしもいましたの」

そうだ。お風呂場で（無理矢理）エステをされていたところ、石鹸で足を滑らせて転んだ女の子がいた。その子も周囲の侍女も「粗相をしてしまい申し訳ございません」と慌てて謝っていたが、私はとっさにバスタオルを巻きその子の足を見て冷水で冷やした。少し腫れていて捻挫の可能性があるのですぐに冷やした方がいいと応急処置をし、その後は冷やしたタオルを足首に巻き付けてポカッと立ち尽くしている侍女たちに引き渡した。

「ミリアさんあの時いらっしゃったんですか。あの子は大丈夫でしたか？肘の打ち身も気になりますし……」

ミリアさんを見ると身体を震わせ涙をレースのハンカチで拭っている。え、な、なんで？思わずあたふたしてしまう。

「真由子様はなんとお優しいんでしょう！さすがはオルベルト様が気かけ……あ、いいえ。あの子は肘の打撲と足首の捻挫で2、3週間ほどで回復致します。真由様がすばやい処置をしてくださったおかげですわ。あと、わたくしは侍女ですのでどうか敬語は控えミリアとお呼び下さいませ」

ん？なんか途中で変なことしゃつてたような？

「そ、そう。よかった。じゃあミリアと呼ばせていただきますね」

「それに加え昼食を御出しする際に私たちにも丁寧なご挨拶を述べてくださいました。真由子様の御付きを選定するにあたり立候補者がものすごく……」

ミリア曰く、昼食後の私付きの選定会なるものの倍率がすごかつたらしい。社会人として普通にしているつもりなんだけど、この世界のしかもこの城内で客人としては私はとてもめずらしい人種みたい。確かに、こんな某ネズミの国の数十倍はあろう城に客人として来るのも貴族ばかりで世話をされることが当たり前の人達が多いだろう。

「さあ、お話はここまでに致しましょう。これから夕食のお時間となります。本日はオルベルト様が一緒にとのことですので御召しかえさせていただきます」

ギリギリと距離をつめて来たうっとりした目のミリアに、裸にされ着せられ髪を結われ化粧直しも完璧にさせられた。

――――

「失礼します。お連れ致しました」

私は大きな扉の前まで連れて行かれるとミリアはそう言ってその

重そうな扉を開いた。壁に侍女が何人が控えていて、シャンデリアが中央に浮かぶ広い部屋には長いテーブルがありその端に1人の男が座っていた。

スタバで私をひっぱったスーツ男はまさにこの金髪男だ。それに社長と同じ気高い雰囲気。シャンパンゴールドの耳までの髪と紫の瞳はまさに社長を人間にした感じぴったり。

ミリアに促され席に着くまでの間、穴があくくらい見つめられないたたまらない気持ちになった。会社用スーツか家でのルームウェアじゃなくてこんな姿だからだろうか。

いま着せられているのは深紅の膝下までのマーメイドラインドレス。膝からは細かいプリーツが入っていて歩くと揺れてとても綺麗で気に入ったが、肩が開いていて谷間ギリギリなのだ。同色の高いヒールで歩くのが大変だから嫌だと言ったけどこれが普通だと言われ納得せざるをえなかった。私の行動範囲は狭く、何より一国の文化は簡単にわかるものじゃない。その後片耳の近くで長い黒髪は結われ反対側の耳近くで白いラナンキュラスのような真っ白い花で留められた。化粧だけはせめて薄くと土下座しどうにか準備が整った。

殿下といえどまだにゃんこのイメージである社長と食事というのに……すでに疲れてしまった。色々あってキャパオーバーが近いのかな。

「片岡真由子です。本日はお食事のお招きありがとうございます、

オルベルト殿下。それとこの国での滞在に關しましてとても良くしていただき感謝しております」

ビジネスモードに切り替えて話し始めた私をまだ見つめていた殿下は、その美しい顔の眉間にシワを寄せテーブルの前で組んでいた手を持ち上げ顎を置いた。前菜が運ばれてワインを注がれ終わった時を見計らい、全員を退出させた。

「改めてだが、オルベルト・ヴァン・スーリアスだ。弟が迷惑をかけたな」

前菜はチーズが練り込んであるパンと春野菜のサラダかあ。なんだか見た事ないような紫色の星形の葉っぱもある。うーむ、と皿に目をやっていると声をかけてきた。恐らくこの国に強制的に連れてこられたことに対してだろう。

「いいえ、起こってしまったことはしょうがないです。それに言葉も文字も通じますし、殿下やエリック君が手厚く保護してくださるおかげで今の所何も不自由はございません」

あ、思わずエリック君とか言っちゃった。様、を付けるべきだった。

「……異界では世話になった」

食事にはあまり手を付けずワインばかり飲んでる。なんで不機嫌そうなんだろう。食事に招いたのはそっちなのに。形式的に必要だったのかもしれないな。私もワインを飲む。あ、この赤ワイン美

味しい。

「いいえ。ただ猫を拾って世話をしただけです。まあ、まさかこの世界に飛ばされるとは思っていませんでした」

渋い顔になったようだが、こんなことにいきなりまき込まれたんだから少しだけ攻撃してもいいだろう。エリック君はまだ小さいので面と向かって責任を負わせたり出来ない。こればかりは彼の現在の年齢を考えた判断能力の問題だ。

「そういえばあのスーツはどうされたんですか？私をスタバから連れ去った際の」

扉がノックされメインが運ばれて来た。ステーキとマツシュポト、豆のスープだ。

「すたば？ああ、男といたあの店のことだな。あれは魔術でそつちの世界の服装を真似ただけだ」

そう言っただけで彼は豆のスープを一口とステーキを数口食べただけでまたワインを飲み始めた。

「確かに私が住んでいた所には会社がいくつかありましたしね」

私はもくもくと食事をした。味があまりわからない。恐らくなんだか疲れているのだろう。あまりしゃべりたくない。向こうも何をしゃべっていいかわからないのかも。社長、猫のままでいてくれればよかったのに。そう言っただけでやろうかと思ったがさすがにマズいかなと思いやめた。大体、仕事相手やフェミニストな人なら平気だが、私は男の人が苦手だ。

沈黙の部屋に運ばれて来たデザートは肉料理の口直しにいい柑橘系のシャーベット。リキュールが少し入っていて大人の味がする。あまりの静けさに私はイライラしてきた。

「なにかしゃべってはとうですか？」

すると今までの謙虚さが嘘のように、

「お前、この俺がめずらしく素直に謝罪の意を示したと言うのに。猫だった時と態度がえらい違うな。どっちが本性だ？」

などぼざいてきた。一人称変わってるし！

「どっちも私です。だいたい殿下に関係ありません」

私は気を取り直しワインをぐいっと飲んだ。

「そうか、面倒くさい女だな」

二重人格な殿下は相変わらず優雅な仕草でワインを飲んでいる。

「女だからってなんだって言うんです。だっていきなり飛ばされてきてしかもこんな場違いな所にいる。私の怒りや絶望はどこへ行けばいいんですか！？私はプロジェクトに関わる可能性はもうない。向こうでの恋愛もすべて意味のないものになった。友達にも家族にも……会えない」



なんだか急に色々と不安になって涙が出た。そう、私は酒に弱いのにワイン3、4杯は飲んだ。お酒を飲むと「強い私」は「弱い私」になる。

私は長いテーブルの向かいにいたはずなのに、気付けば「ああそうだな」「へえ」などという殿下の隣りに座り、グスグス俯き泣いて愚痴を言った。

頭もポンポンしてくれたらしい人なのかな。猫になってといたら猫になってくれたので「社長ー！！」と抱っこして撫で回した。にやうにやう言ってたけどわかんないよ。

そして……………

私の記憶は曖昧になった。

またか！

## 食事会（後書き）

人気のかまぼこ（笑）の小話書きましたのでよければ活動報告をご覧下さい\*

猫の甘えん坊丸出し気質なのがかまぼこですね。社長は優雅なツンデレ猫気質のつもりです。

## 散々な日々（改稿）（前書き）

R15です。ご注意ください。

## 散々な日々（改稿）

小さい頃、私はグリーンピースが大嫌いだった。だからいつもシチューやハヤシライスに入っているのを取り除いては怒られていた。

でも大学生になって一人暮らしを始めた頃、某デリカテッセン（サンドイッチや持ち帰り用の西洋風惣菜を売る飲食店）でグレープシードオイルで炒められたベーコンとビーンズの中に入っているのを気付かずに食べて気付いた時には好きになっていた。無性にグリーンピースご飯が食べたくなったこともあるくらいに。

<嫌いなものはいつか好きになる>そんな夢を見ていた。

なんだかあったかいものに包まれている。

目の前のものに頼ずりすると背中をギュッと抱きしめられた。グリーンピースご飯に塩をふって大事なおにぎりにしてるようにギュッと。

優しく頭を撫でられている。最後に綺麗なおむすびの形に整えるように。

でも私はおむすびに食べられたみたい。だって口が塞がって息が

出来ないから。

息をしようと唇を少し開くと柔らかいものが深く入り込んで私を貪ってる。おにぎりに食べられるのはおかしい。私が食べるはずなのに、と頑張つて私も口を開けて舌を絡ませる。チュツと吸つて逃げられないようにするともっと深くまで貪られてしまう。

「んう、ふぁ……」

逃げようとしてももっと強く抱き込まれてしまう。

「はっ、む……あっ」

この心地よさが現実か夢かわからないまま、また何も見ない世界へ漂って行つた。

ちゅんちゅん。バサバサ。ピーチチチ……

目の前にさらさらとした金色の毛並みが見える。社長だ。ぎゅつと両手で温かい毛並みを抱き寄せスリスリ頬ずり。

むぎゅー。かわいいな社長。

その時くぐもった低い声が下から聞こえた。私は目をつつすら開

けたまましばらく社長を撫で回していた。

が、もぞもぞさわさわと腰やお尻を撫でられているような気がする……。

「え！」

慌てて社長を引き離れた。私は見知らぬ部屋で人間であるオルベルト殿下を抱きしめていた……。うわ、すっごく怒った顔してるよ。起き上がった社長から睨みつけられた。

「う！頭いっつたぁ……」

思わず二日酔いの頭をかかえる。ゆっくりと起き上がると白いシートがハラリと落ちる。私昨日はどうしたんだっけ？記憶がない。

「しゃちよ、いえ殿下。すいませんがこれは、ここは一体……」

「ああ、頭が痛い。」

「ふっ、絶景だな。言っておくが未遂だ」

ほどよく筋肉が付いてしなやかな上半身をさらしている。絵になりますね。そんな殿下は目を細め私を眺めていた。

未遂？絶景？嫌な予感がして自分を見ると、ハダカ！！

「な、なんで！？私昨日、えっと？や、やってないですよね……」

胸を片手で押さえシーツを引き上げた。どうやらパンツははいたのでハダカではない。とはいえ不安は拭えない。

「お前は飲んだくれた後、服がキツいと自分で脱いだんだ」

こんな悪酔い一度もなかったので自分でもビックリした。

「・・・わかりました。ご迷惑をおかけして申し訳ございません。服を着ますので少しあちらを向いていただけますか」

バサッとバスローブが投げられたがこれを着ろってことだろう。殿下はさっさと同じものを羽織りスタスタ歩いていった。

私はあることに気付いて声を荒げた。

「ちょ、ちょっとおおお!!」

だって赤い斑点、いわゆるキスマークが胸元や二の腕にくっきりとついている。嫌な予感がして思わずシーツを捲ってみると何故か太もものき、きわどいところまで！ひいっ！足首にまで！鏡を見えないからわからないけど、恐らく首にもつけられているだろう。

ん？しかもなんか口内や唇がぶつくりとしてたり違和感があるよう  
な・・・

唇に手を当ててみると、クツクツと笑い声が聞こえた。

「お前はどこも柔らかいな」

そう言い置いて肩を震わせるやつの姿は扉へ消えた。

「このヘンタイ殿下!!!」

しばらく怒りとパニックでベッドにもぐっていたが、迎えにきた

ミリアに連れられ部屋へ戻った。なんだか微笑を浮かべている。

お風呂が隣室にあるのでさっさと逃げた。が、魔力がないとお湯がでないためミリアに入れてもらう。そしてドレスの着付けの際は必然的に裸を見られる訳で……

「やつぱり！さすが真由子様！」とか「あの殿下が……！」  
興奮状態のミリア誤解を解くのが大変でした。

――――

それから数日は殿下と会うことはなかった。公務の仕事が忙しいらしく行動の時間帯が違うのだ。

しばらく会いたくないのでちょうどよかった。いつの間にあんなに……背中も含め何十個あるんだ。

私はしばらく自室と中庭で過ごした。

サンドラ女史にこの国のことについて色々教わるためだ。サンドラ女史は、老舗の香水店の跡を継ぐまで魔術学校に勤めていたという。今回はエリック君の口添えで私の専属教師になってくれた。なんと旦那様はこの城に仕えているんだそう。いつかお会い出来るそうなのでとても楽しみにしている。

ちなみにエリック君は私の首、腕にあった赤い痣をめざとく見つ



けると、につこり笑って消えた。一体どこへ行っただろう？

私にも魔力があるので魔力を表に引き出す練習をすることになった。魔術、財政、法、生活様式、マナー etc。完璧な女性だ、エリック女史。そしてスパルタ……

＜何をどうしたいかを頭に思い浮かべ、力をその一点に集中させる＞  
ほぼ全国民はそうやって魔術を使い生活している。簡単なようで難しい。

害をあたえるような魔力は禁止、もし法を犯せば自身だけでなく家族など関係者にも仕打ちがある。絶対に魔術で犯罪を犯さないため、罰金や牢獄以外にも残酷だったり厳しい刑罰がある。

が、私はどんなに念じても何も起こらない。何日も何日もやっているのに。女史も困惑気味だ。

「真由子様の魔術はもしかしたらまだ発動される時期ではない可能性があります」

中庭で女史とお茶をしていた際にそう言われた。

「どういうことですか？」

紅茶を飲む。今日はレモンティーだ。ほんのりと蜂蜜が入ってい

る。

「魔力は普通なら5、6歳頃の子供は使えます。本当に羽のような軽い物を浮かせる程度ですが。それから初等学校へ通い魔術に付いての法など様々なことを学びます。そこで特に優れていると判断されたものは魔術学校へ移るということです」

確かに小さい子は手の届かない物をとろうとするけど動けない。だからその時初めて微弱の魔術が発動される。

「つまり、羽も浮かせられない私は6歳児未満なんですネ」

目の前のバタークッキー、紅茶、そして練習用の羽を見つめながら思わず呟く。

「ええ。そうなります」

女史、軽く傷つくから目を見てハッキリ言わないで！こう見えても仕事もバリバリしてきたし、この国のこともすごい勢いで吸収してる。なのに魔力がないなんてどうしようもない。

私はどうなるんでしょうか……。

たまに一緒に食事をする機会があるエリック君には食後にかまぼこになつてもらふ。テーブルに突っ伏していると、たしたしつぷにっとなをたたいて「にゃあ」と鳴いてくれるんだ。目尻が下がるのは仕方がない。エリック君ももちろんかわいいけど。

たまに猫の姿になってやってくるから一緒にお風呂に入る。私が日本でお風呂で洗ってあげたらすぐ気に入ってくれたみたい。マッサージ付きだと尻尾を動かして「んみゃうつ、なう」などたいていそうご機嫌だ。湯船で泳ぐ子猫ってかわいらしい。人間の姿と一緒に入るのは抵抗あるけど猫の姿だしね。

エリック君曰く、この国や城には猫が多くいるらしい。魔術を秘める動物だから。

猫と言えば、今度ジンジャーエールを作ろうかな。生姜、水、ハチミツ、砂糖、鷹の爪を鍋で煮込む。生姜が透き通ってきたら、レモン汁、シナモン、あればグロブをいれる。あとはソーダで割ったりしてピリツとした辛さを楽しむ。エリック君には猫の姿で飲んでもらおう。ハインラインの小説「夏への扉」に出てくる猫がジンジャーエールを飲むように。

あと、ここには大きな厨房がいくつかあるようだから使用許可をもらう予定。ストレス解消だ。

ここへ連れられたことで多くの物を無くしてしまったけれど、こんなにいい待遇をさせてもらってるんだからご飯でも振るまいたい。あの状態にもお裾分けしよう。城のご飯に比べ質素だけど、エリック君にも「また作って！」と目をキラキラさせて言われたしね。私も気付いたんだけど、この国の料理は結構ワンパターンなものが多い。輸入も盛んで食材が多いならもっと活かせばいいのに。

毎日が勉強で大変だけど、こつやって前向きにならなきゃ。

## 散々な日々（改稿）（後書き）

ヘンタイが出てきました。

ジンジャーエールの作り方や中に入れるスパイスは様々ですのでお好みでどうぞ。

夏への扉 <http://ja.wikipedia.org/wiki/夏への扉>

秘密の会話（前書き）

side エリック（かまぼこ）

## 秘密の会話

「みぎや！にやう！んにやうう」

まさかこんなに早く探知されるとは思ってた。それだけ魔力を消耗したのだろう。こんなもののために異界渡をしたのではない。焦ってペチペチ叩いていると兄さんは気怠そうに目を開けた。びっくりさせないでよ。

しばらく真由子さんが看病をしていた。僕は、なんだかいつもと違い力の無い兄さんを観て少し後悔していた。が、その後あまりに「にやううう、みやう」（何をバカなことをしているんだとか帰るぞ）とか言ってくるので無視だ。うるさい。

――――

いつも過保護すぎなんだ。それに僕、知ってるんだ。

僕は正妻、兄は側室の子。でも僕は王位継承権は第2位だからっていつも微妙な扱い。母様が身体が弱いのは仕方がない。

そして僕は、当たり前のように力を持つ側室に妬みを持つ。そんな女の子供である兄を妬むのも当たり前。なんたって母様を日陰の存在にしたんだからな。

兄さんは今、先の大戦後の各地での争いの沈静化・高官や貴族間などの後継者争い・金融政策など、最も重要で大変な問題をものすごい早さで解消させようとしている。

．．．．．僕が成人して即位する前に。

恐らくあまり眠っていない。あまり食事も食べていない。たまに薬を飲んでる。どんなに余裕があるように見せても、僕は知ってるんだ。

そんな兄は疎ましい存在であり、そしてまた．．．．．

――――

それにしても風呂場で洗われているところは見物だ。「フーツ！」（見るな！）と言われても、ねえ。まあ兄弟そろって女の人と入浴って変なシチュエーションならさすがに普段冷静な兄さんも動揺するか。ニヤフニヤフツ。これはスミスたちに見せたらさぞ滑稽だろうと想像し、異界土産にすべくこっそり魔術を使った。映像を記憶させるんだ。

真由子さんが身体を洗っている間、

「真由子さんっていうんだよ。片岡真由子さん」



「兄さんより2つ年下の25歳」

「身体柔らかいよね。肌きれいだし」

「なんかいつもいい匂いがするんだよね。なんでだろ？」

「料理が美味しいんだ。城の食事とは全く違うしへたしたらそれより絶品」

など色々と教えてあげた。水音で真由子さんには「にゃあーみやうー」って言うても聞こえないだろうから。

あつ、兄さんズルい！僕も真由子さんとお湯に入りたい！そしていつものように抱っこしてもらった。ゆっくりとお腹や背中を撫でてくれる。思わず顔を谷間にスリスリしてしまう。この柔らかい感触がいいんだよね。

「なうーっ」

極楽極楽。

今夜は僕が寝る特等席（特等ベッド）を兄さんに譲ろう。あ、いいこと思いついた！

ー＊ー＊ー＊ー

真由子さんがコンビニってどこへバターを買いに外へ出た瞬間、兄さんは静かに魔術を解いた。

「なぜ異界渡りなどした？それになんだ、あの女に対する態度は」  
怒り心頭の様子は、組んでいる両腕の握りしめられたシャツの皺でわかる。

異界渡りは最高難度の魔術だ。その上にどこへ飛ぶか分からない。大抵なら失敗して自分たちの世界のどこかだが、魔術が高すぎる者は魔術の無い世界へ飛ぶことがまれに起こる。そうなれば位置を特定するの探知は難航し、異界渡をした者と血の繋がりがある者でないと連れ戻せない。

「だってさ、ヒマだったんだ。学校の課題も終わってるし。ギルが探してた？説教が待ってるだろうな」

自分も静かに魔術を解く。全然関係ないギルを巻き込んでしまったことやあっちへ帰った時のことを思い浮かべると少し憂鬱になった。

今まさに、耳と尻尾が付いていれば確実にヘニヨンとなっている。

「真由子さんはさ、ご飯を作ってくれるんだ。それに優しい人なんだよ？心からね。だからいいんだ」

城に住んでいれば汚い人間を必然的に目にする。たまには自分の存在を無にしなければならぬこともあるし、繕わなきゃ負ける。

そんな中でこんなに温かに包み込んでくれる人はなかなかいない。  
自分を曝けても大丈夫と思える人間なんて滅多にいない。

まあ真由子さんは猫を飼ってる感覚なんだろうけど、僕は離れたくないしね。

「単なる遊びではないだろう。何が目的だ？」

怒りで渋い顔をしている兄はその強い瞳で心の奥底を探ろうとする。確かに遊びではないつもりだ。この異界渡りは発動させた者はかなりの間、心身を休めなければならぬほど魔力の消耗を費やす。

「まあヒマだったって言ってるじゃん。まあお迎えが着たしそろそろ帰るよ」

「じゃあい……………」  
「ただいまー」

今すぐ、という言葉に真由子さんの声が重なる。ナイスタイミング！

ぼふんぼふん！

舌打ちする兄。魔術がバレたら面倒くさいもんね。

「にゃうん、んにゅう」

お帰り、真由子さん。早く美味しいご飯つくって？

――

少しだけ時を遡る。

朝焼けが小さな窓から差し込んできた頃、小さな黒猫はこっそり魔術を解いた。

少しだけ背伸びをした後、そつと真由子の青い水玉模様のパジャマのボタンをはずた。そして疲れのあまり爆睡している社長をパジャマの中に寝かせまたボタンを閉じた。

寄り添って寝る姿に目を細める。

空を自由に飛ぶ鳥たちの鳴き声が聞こえてきた。自由に、何ものにも縛られるものなどなく。

「兄さんはもつと自分の為にも生きるべきだ」

自由にするため、自由にする存在を見つけるために僕は異界渡りをしたんだよ。これはエゴかな？

疎ましい存在である……けれども、それ以外の何とも言えない存在だ。人間は感情すべてに言葉なんか付けられない。そんな簡単なものじゃないよ、1人の人間が存在することって。

しばらく眺めた後また猫の姿に戻る。いつか兄と真由子が本当に

寄り添える立場になればいいと思いながら。

\*

そしてこれももちろん、お風呂の時と同じ、映像記録済みだよ？

ニャフニャフッ

## 秘密の会話（後書き）

真由子前限定で「兄様」といい子ぶるエリック君が好きです。次回はside オルベルトです。

いつもご訪問ありがとうございます\*

## 側にいたい（前書き）

s i d e   オルベルト（社長）  
少しだけ R 1 5 です。お気をつけ下さい。

## 側にいたい

多くの成人男性が着ているスーツを真似て着ていると周囲が振り返る。特に女どものチラチラ窺う視線が鬱陶しい。あまり目立ちたくないため不本意だが猫になって探していた。

異界渡りをして2日目、魔力の消耗が激しく身体が鉛のように重い。常に探知魔術を張り巡らせている。また猫の姿の方が術を施す面積が少ない上、万が一見つかった時猫なら即座に逃げられるので姿眩ましの魔術で姿を見られないようにした。そして日々の激務もあり疲れがピークに達し目も開けるのも億劫になってきた。小道でうずくまっているとエリックの防御魔術の気配がした。同時にふわりと香る魅惑的な香り。

そこで意識が途切れた。

――――

国民や周囲の皆には俺が王位を継ぐと思われている。それもそのはず、王位第1継承者としての国政や外交の責務、そして政治を行う宰相の補佐として慌ただしく国政に関わってきた。

決して貧しい国ではない。むしろ大国で領土も広く貿易も最も盛んだ。だからこそ平定と発展を同時に進められる。

戦争に対する騎士団や魔術団は残ってはいるが、無益な争いは起こすつもりはない。いつ開戦を仕掛けてくるか分からない好戦的な



他国への備えだ。今後のことを考えると出来るだけ争いは控えたい。そのためには何でもするつもりだ。

スーリアス王国の成人は16歳。あと数年で俺は出来るだけ国を安定させなければならない。理由は誰にも語るつもりはない。そのことを考えると、数年前に夜盗に襲われて負った古傷が疼く……

――――

弟のエリックは魔術の才に特に優れたうえに、薬学や人体学にも精通している。なのにもいつも周囲を混乱に巻き込む。そんな所に今回の騒動だ。悪夢なら目覚めて欲しい。

そう、これは悪夢だ。スプーンで粥や栄養補給させられている、見知らぬ女に甲斐甲斐しく。

「お身体大丈夫ですかあ？」

にこりと笑ってゆつくりと撫でてくる女の後ろからは、黒猫の視線。尻尾を揺らし面白い物でも見るような眼差し。ややこしいことになる前に早く連れて帰らなければ。

風呂へ入れられる際はさすがに驚き抵抗したが、大人しくせざるを得なかった。この女は見かけによらず強引だ。まあ気の強い女は

嫌いではないが。

エリックが知らない情報を流してきた。

確かに良い身体をしている。

スレンダーで色白、胸は豊満とはいかないが大きく柔らかかった。長い黒髪やすっきりした目や口元が艶やかで儚げな雰囲気醸し出している。おそらく無意識なのだろうが。現在、猫の姿である自分たちに対しての扱いなども丁寧だ。

先ほどの粥がとても美味しかったことを思い出した。シンプルな見かけだったが素朴な優しい味。城での食事の概念はただの栄養摂取だった。なのに今回の粥一つにしても、心惹かれる何かがあるような気がした。

「ねねね、気に入ったでしょ。真由子さんのこと」

「……明日にでも戻るぞ。ギルが首を長くして待つてるはずだ」

「げえっ」

目の前の猫は「んぎゅう」とまるで蛙のひしゃげたような声を出した。

そんな弟はこの女にはひどく執着していた。身をすり寄せて甘える仕草をする姿に驚きを隠せなかった。

大抵の場合ギルや俺など、近しい者の前では嫌な顔をしてくる。スミス曰く、「悪魔」「腹黒」だそうだ。また、臣下や侍女など他

人に対しては、一見かわいらしく見せているが、時折恐ろしく冷たい目をしているのを知っている。

一体この女になにがあるというんだ。

その理由はすぐに分かった。エリックとこの女は、どこか似ている。数日過ごしてどんな人間か察し、共鳴した部分があるのだろう。

それだけではない何かもある。半ば強制的に女と寝る羽目になった際、夢も見らずに安心して寝れた。首を傷つけてしまった代償に、回復術を込めて血を舐めた瞬間、今まで香っていた匂いが一瞬だけ強くなった。もしやと思ったが、可能性はかなり低いため気のせいだと思っていた。

段々と浮かび上がってきた首のアザを見るまでは。

――

「連れてくればお前は帰るんだな？」

「わかってる。だから早く行けよ。あの雰囲気は真由子さんに絶対よくない」

女のことは別にどうでもよかったが、女を店内から連れてくれば

異界へ帰る、という取引きをした。なのでこの世界の服を着て、店の側の暗闇から、明るく照らされた店へ入った。

が、あの女は今にも涙が出そうなのを必死で我慢するように見えた。細い一本の線が張りつめたようだ。向かいの男はそれに気付いてないのか、少しだけ余裕が見える表情で笑っていた。突然腹の底から怒りともいえる感情がせり上がってきた。足音を鳴らし近づく。

「真由子。迎えに来た。帰るぞ」

この男はそんなに大した器じゃないと改めて見て思った。多くの臣下や民と接するのでそういう感覚が身に付く。一瞬で見分けられなければ命を奪われる危険だ。偽善や悪意、もしくは何も持っていない人間は上辺にも表れるものだ。

ぽかんと見上げてくる女の華奢な腕をつかみ、腰を支えて連れ出した。そう、弟とのただの取引きのためだ。

店を出ると女は気を失った。男とどんな会話をしたのか分からなかったが、うつすらと涙が浮かんでいた。この軽い身体を思わずそっと抱きしめた。そして……自分の勘違いでバレた。

「よかったね、兄さん。二度と会わない男なんかに牽制しつつ店から連れ去るなんて、何気に気になってたでしょう？」

この騒動の元凶なうえ、女の前で「兄様」と呼んで猫かぶりする弟に殺意を覚えた。

よく気絶するこの女を連れて帰った後、女が寝ている部屋へ入り、

顔を眺める。エリックが執着する人間。あの存在の可能性がある女。そして、なぜだか放っておけない存在。

その感情の正体がよくわからずに、顔を撫で回し思わず口づけた。放っておけないだけじゃない。側に置いておきたいと思った。何を考えているのか知りたい、笑って喜ぶ顔が見たい。どんな顔でも見たい。その瞬間、思わず欲望を秘めた舌が相手の口内へ深く侵入させてしまったが、心地よさに背筋が震えた。無意識に続きを欲している。

何度かこの女が作った食事を食べたが、また食べたいと思わせられた。プライドや義務で作る城専属のシェフの料理より、自由な組み合わせで味の変化を楽しむ料理に惹かれる。そしてなぜかこの女の側にいるいつも見る悪夢も見ず、頭痛もなくゆっくり眠れた。連れて帰ったのは、術がバレたからもあるが、またあの食事を作ってもらう為。側にいさせる為。そして……エリックの為でもある。

苦しそうな女の声で意識を引き戻した。深い口づけが名残惜しく感じたが、エリックも訪れるだろうと早めに引き下がる事にした。

溜まっていた仕事が片付いた頃、女を晚餐に誘った。贈っていた赤いドレスは細い腰を際立たせてより一層、女性らしく見せていた。異界では優しく笑う聖母のような女を、シャンデリアの光が女の姿を妖艶に変えていた。

そして、聖母など思った自分を取り消したくなった。

なぜか俺にだけ突っ掛かってくる。エリックのことや、バレて強制的に連れて帰ったことなど反省はしている。もう二度と向こうの世界へ戻れなくなったことで多くの物を失ってしまう状況にもさせた。

いきなり怒ってしまいにはグズグズと泣き出し猫になれとまでぬかしてくる。酔っぱらいに何を言っても不機嫌になるから猫の言葉で「なう、んにゃあ」など分からないよう突っ込んでいた。さんざん上司や仕事、英臣という男や友人の話などをしていたが、しまいには勝手に下着一枚を残しほぼ裸になった。一体何の拷問だ？ 似非聖母には飲ませすぎではならない。

人間に戻り移転術で自室へ運び、少しだけ味わいたいという気持ちと、目が覚めた時の反応の見たさに所有印を刻む。ベッドに横たわる女の綺麗な白い肌を撫で、ピクピクと跳ねる身体を押さえつける。

「んむ．．．はあん」

アザがある首を一瞥し、柔らかな胸や色香を漂わせる背中など全身に印を刻んだ。段々と大きくなる悩ましい声が上から聞こえてきて自制が効かなくなりそうになる。

「真由子、か」

この女が望んだように、この世界で生きていけるよう教養などの面で一から教育していくつもりだ。

「んっ」

幸せそうに眠る女に、最後は何度も啄むようなキスをして抱きしめて眠りについた。また悪夢は見なかった。

\*

「真由子さんのあのアザは何？足首にまでキスマーク見えただけだ」

「さっきからグチグチと、お前は何をしにきたんだ？それがどうした」

「意識の無い女に手を出すなんてサイテー。それってどうなの。犯罪でしょ？」

「……………」

痛い所をつかれ返事に窮す。

その後、真由子には匿名でドレスや宝石（ちなみに主に赤や深紅

の  
（  
が贈られたという。



## 側にいたい（後書き）

歩く18禁ですね、もう。どこを舐め回しているんだか。

## 畑の木

この世界に来て約1ヶ月経って色々分かってきた頃、中庭以外の場所へ許可が出た。でも魔術がまだちつつとも使えないため、誰かと一緒に行動することが絶対条件だけど。バリキヤリだった私からすると、かなり屈辱だ。穴があつたらはいりたい、むしろ掘って飛び込みたい。

でもエリック君のおかげで小さな調理場が使えるようになったので、気分が軽くなった。城に滞在してるってことは国賓扱いだからなかなか使用許可が出なかった。私はちなみに他国から留学中の貴族の設定。この国がどんなに安全そうに見えても、誘拐や暗殺なんかはもちろんある。異界から来たことは、その知識などが悪用される可能性があるため、近しい人を覗いて秘密。

「こわあー」

ミリアがテーブルにお茶を優雅な所作で置く。朝ご飯にハーブティーと数種類のジャムやハチミツを付けて食べるビスコッティ、そしてたくさんフルーツが用意された。

思わず呟いてしまったけどスミスさん曰く、狙われるのはあたりまえのことらしい。特に女で殿下たちと関わっていると何かと物騒だそう。

「大丈夫ですわ！私も命を賭けてお守り致しますし、何より殿下たちがそんなことさせない筈ですもの」

うふふ、と笑うミリアは今日もかわいらしい。でも命までって余計リアルに感じて怖いよ……

「女の争いは恐ろしいですからねえ」

と、対面に座り遠くを見つめ話し続ける爽やかイケメンスミスさんは、何かしら巻き込まれたことがあるんだろう……。

今日は1日お休みの日。

エリック君は私が休みだと知り部屋に遊びに来ようとしたが、異界渡りの無断欠席や罰のせいでいまだなかなか学校から出させてもらえないらしい。なのに私の部屋やお茶に来ていた、つまり学校をぬけだしていたということ。「真由子さんと一緒にお茶したいんだもん」なんて、下から上目遣いされても惑わされないようにしなきゃ。

あと、ヘンタイ殿下は最近見ないと思ったら、他国へ数週間出掛けていたらしい。昨日戻ってきたってミリアが（なぜか）教えてくれた。殿下となると外交事情もまた大変そうだ。どうせ女といちゃこらしてるんだろう。本当に女の敵だ。人が寝てる間にあんなに所有印をつけるくらいだからね！考えたらイライラしてきた。一生猫の社長でいればいいのに！

これから久しぶりに何かご飯を作ろうと思う。まずは栄養管理から調理をしている宮廷料理人たちが働く調理場を見学しに、ミリアとスミスさんを引き連れて行った。見学の旨は事前に伝えてあったようで、スミスさんが調理場の中に入り少しすると、バーン！とい

う勢いでドアが開け放たれた。目の前には50代くらいのいかにもコックという厳ついひげ面のおじさんが仁王立ちしていた。じっと見られている。な、なんだろう。

「お前さんが異界渡りの。オルベ．．．．料理長！その噂は厳禁です！」

大声を出したスミスさんが慌てて私とハンスと呼ばれたコックの間に立ち睨み合う。

「あの腹黒エリツ．．．．調理場が消し炭になってもいいんですか！」

再度大声のスミスさん。ん？何だ？ハンスさんは異界渡りのことを知らされてる1人なんだな、と考えつつ一連の出来事にポカンとしてしまったが慌てて、

「本日は見学の許可をいただきありがとうございます。私は片岡真由子といいます」

この国の女性のマナーとして、ワンピースの裾を掴み膝を折り深々とお辞儀する。挨拶はいつでもどこでも大事だからね！すると少しビックリしたようで、

「いや、こちらこそこんなべっぴんさんに挨拶させてすまない。俺はここで宮廷料理人の長をしてる。ハンスって呼んでくれ」

豪快な身振り手振りでガハハと笑い、私の肩が陥没するぐらいの勢いでバシバシ叩かれる。い、痛い。

はぁーこれはあの噂も本当かもなあ．．．．など腕を組み静かに呟いている。

「ハンス様、本日は真由子様に調理場と、出来れば『畑』の案内をお願いしたいのですがよろしいでしょうか。異界とは全く違う栽培方法などに興味を持たれたようなので」

私の後ろに控えていたミリアが膝を折った。そう、ぜひ『畑』を見てみたいのだ。本で読んだので知識はあるものの、わくわくが止まらない！

「そうなのか？じゃあぜひ行ってみよう。きっと彼らもお前さんを気にいるだろう。しかし話には聞いてるけど料理が絶品らしいなア」

顎をなでながら面白そうに目を輝かせている。恐らくエリック君あたりからの情報が流れたのだろうが、料理長みたいな偉い人にそう言われると思わず照れてしまう。

「いえ、そんな……。私が作ったのは日本での家庭料理です」

「ニホン？ああ、異界か。エリック様から向こうでの話を少しだけ聞いたが、実に面白い！ぜひその料理たちを教えてくれ。味を追求するのが料理人の仕事だからな」

ガハハッと豪快に笑うハンスさんからは、この城で食べた繊細な料理は想像ができない。焼き肉！って感じだ。でも親しみが持てる人柄なんだろうということとは分かる。

つまみ食いにくるエリック君をいつも追いかけたり、面倒くさがりあまり食事をしないオルベルト殿下を叱るのも仕事らしい。昔からの王室専属料理人の家系で育ったため、この城ではかなり馴染みが深いようだ。

日本のレストランと変わらないけど桁違いにでかい調理場の見学をざっと終え、『畑』へ行く途中に色んな話をした。この国、そしてこの世界には調味料が少ないと思ったことを伝えると、輸入するよりも自国で生産される方がいいから、異界にある調味料をぜひ作ってほしい、という話になったので醤油や味噌など作ろうと思う。大豆あるかな？

日本での食について根掘り葉掘り聞かれたが、ガスでわざわざ火をつけたり、デパートやスーパーでは水槽の中で魚が泳いでいるっていう話にはとても驚いていた様子。魚が泳ぐのを見ることはあまりないらしい。それはこれから見る光景のせいなのだ。

＊

「うわあああー！！これが『畑』なんですね！」

目の前に広がるのは、大きな木がたくさん植えられている森。しかも区画整理されていてその木にはそれぞれピーマンやニンジンがぶらさがってる。パイナップルが重そうに枝をしならせてるのはなんだか支えてあげたくなるなあ。

「ここは畑の入り口の『緑畑』だ。主に野菜や果物が生える。奥には魚の『青畑』や肉の『赤畑』、薬草の『黒灰畑』など何十もの畑があるぞ。お！あそこを見てみる」

ハンスさんが指さすほうれん草の木の根元には猫がたくさん集まっていた。

「みやうー！んーにや」

木の上から声が聞こえる。

「みゆう。みゆうみゆ、みゆみゆう」

「なん。なあーん。んなつ」

白や薄ピンクや群青など色とりどりの猫が、木の幹にもつきり生えているほうれん草をキャッチしようと待ち構えている。ポトリ、と芝生の上に落とされたほうれん草を口にくわえ、大きな木で編まれたカゴにどんどん積み込んでゆく。

なんと、猫が城の調理場まで食材を届けてくれるのだ！事前に必要な物を言っておくと、すぐに届けてくれたり指定した時間帯に運んでくれることもある。何となくピザの宅配サービスを思い浮かべてしまったのはご愛嬌。

しかし、かわいすぎる！それに広大な食材の森をタタタツと小さな身体で駆け回るなんて働き者だ。

「木に生える食材を俺らの元に届けるのが彼らの仕事さ。人見知りで臆病で少し恐がりだが、長く付き合ってみるとなかなかいい奴らだぞ」

私たちから少し離れた所から腕組みして彼らを見るハンスさんはまたガハハと笑った。

「にや！！」

その大声に気付いたのか猫たちが一斉に動きを止めこちらを見つめてきた。

私と目が合った灰色の猫が、尻尾をピンツと立てたままゆつくりこっちへ近づいてきた。他の猫たちは木の下で訝しげに私たちを見つめている。その時、後ろで控えていたミリアが小さな声で囁いて私の左腕をそつと引き寄せた。

「ここにいる猫たちはとても人に敏感です。ハンスさまや他数人を覗いては慣れていないので攻撃される可能性があります」

「え？でもこんなにかわいいのに」

後ろへひっぱろうとするミリアや、斜め前で私を守ろうとするスミスさんが理解できずにいた。文献にも攻撃するなんて書いていなかったし、猫が攻撃なんて考えられない。何よりなでなでしたい。今の気分は、ほぼ部屋と中庭のみの監禁生活サラバ！私に癒しを！って感じた。

「後ろへ下がってください。ハンス殿も彼らをなんとかして下さい」

「俺がいるしそいつら特に何もしなと思うけどなあ。何より普段は見かけない人がいると、真っ先に攻撃するはずだぜ」

ハンスさんは相変わらず腕を組んで知らん顔をしたまんま少し離れた所からこちらを眺めている。私とミリアを左腕で後方へ誘導し、反対の腕で腰に差した立派な剣まで抜こうとするスミスさんに慌てて制止の声をかけた。

「ま、まって！さすがに猫に剣はないんじゃない？」

「ここの猫たちは少し事情が違います。城の食材を管理する猫なので、部外者を攻撃するよう訓練されています」



「でも、そんな雰囲気じゃないよ？どこからどう見ても人懐っこそうな目をしてるように見えるけど・・・」

灰色の猫の翡翠色の瞳が近づいてくる。私がスミスさんの前にスルリと出てしゃがみ込むと、後ろから「真由子様っ」とスミスさんとミリアの声が同時に響いた。

「・・・・・・・・・・！？」

猫が喉をゴロゴロと鳴らし、差し出した手に頼ずりしてくる。  
「ね？そんなことないでしょ？」

啞然として後ろにいる2人を振り返りなでなでしていると、さらに向こうでこちらを眺めていた数匹の猫たちが駆け寄ってきて、足や手に絡み付いてくる。あつたかくって柔らかいー！

「みゃー、みゃうう」

「ぶふっ、ぶにゃん」

「なうう」

「へえ、こりゃ俺でもこんなことにはならないな」

ハンスさんが脚を交差させて壁にもたれながら目を細めている。

「い、一体どういうことでしょう？猫たちが自ら寄っていくなんて・・・」

「俺も城の猫たちが擦り寄るなんて光景、見た事ないです」

奇妙な出来事に何とも言えずただ驚いている2人。この『畑』に忍び込んだ何人かは彼らの火災の攻撃をくらい医務室に運ばれたという噂も聞いていたので、スミスはこの異常事態に順応出来ていない。ミリアもまた、誤って迷い込んだ見習い侍女などが引っ掻かれたことなどを耳にするので同じ反応を示した。

「んなう」

小さな水色の子猫が背中にしよってある籠の中の林檎をポトリと落とし、両手でタシタシつと差し出してきた。林檎も小さくてかわいい。どうぞ、ってことみたい。

「わ！ありがと。後で他の畑も案内してね」

「『にゃん！』『』」

擦り寄ってきた猫たちが声を揃えうなずいてくれた。

## 畑の木（後書き）

更新遅くなり申し訳ありません。お待たせしました。

カラフルなにゃんこ達です。でもショッキングな色とかじゃなく、優しい色合いの猫です。

## お土産ダーリン

猫たちのボスはエメラルドのような濃緑色の猫だった。

「まゆこちゃま、げんざいこの地区の木はけんきゅうちゅうなのでし。びょうきなどに負けないようにつよい木にしゅるんでちゅ」

威厳の欠片もないかわいいうり言葉だけど。

\*

あの後、ハンスさんが急遽仕事の都合で調理場へ戻らなければならなくなった代わりに、魔力が一番強かったこの子が言葉が喋れるとあって私の案内役をかって出てくれた。いつもはボスとして人間との交渉役をしているようで、今は私の為に特別休憩時間中。ハンスさんがいなくなって、今日は野菜が見れて満足して帰ろうかと小さな甘い林檎をかじっていたら、すごい速さで小松菜が生えてる木から降りてきたもんね。「わたくちがあんないちましゅ!!」って金色の目を輝かせながら。

「この庭にしゃべる猫がいるなんて聞いたことがないですね。意思疎通が出来ないからこそ問答無用で襲ってくるのでしょうか聞いていませんでしたし……」

スミスさんはこの猫を知っていたのか驚いてはいないが少し物珍しそうに眺めていた。ミリアは侍女服のワンピースが草につかないよう片手で優雅に裾を持ち上げ、急展開についていけない2人は

私のすぐ後ろをゆつくりとついてきていた。

「襲ってくるって物騒な．．．こんなにいい子たちなのに。それにこんなことでビックリしてたら私の劇的な変化は米粒みたいなものね」

でもビックリには私はもう慣れちゃったかな、異界渡りで魔術だったり色々と順応していかなきゃやってけないしね。パニックになる年齢や性格じゃないしさ。

＊

ゆつくりと短い草が生えているプチ草原を歩く。

。 現在いるのは野菜の『緑畑』のとなりにある肉の畑。通称『赤畑』

なんとその森自体が巨大なシャボン玉に包まれている印象だ。羊や牛が木に囲まれた草原でご飯を食べていたし、小さな噴水がある水場にはアヒルなどもいて「ガアガア」と行進しつつ大合唱していた。これぞ、ザ田舎！って感じでいいなあ。生態系がしっかり出来てそうだし。まあこの世界の生態系なんか知らないけどさ。

「研究中なの？へえーこの世界にも品種改良みたいなものもあるんだ。あ、ここにも見張りがいるのね」

目の前のエメラルド色の猫に話しかけ周囲を見渡していると、野菜の畑でもいたうろうつろとしている見張り役の猫たちがタタタツと駆けてきた。「危ないですっ」っと私を後ろに引っ張りながら小さく悲鳴をあげるミリア、スミスさんは私を守るように前へ身体を

滑らせた。ホントなんで怯えるのかよくわからない。私の頭の中では、猫が襲ってくるなんてありえないし攻撃っていつてもひつかいたりやパンチだと信じていた。

「にゃあ！んにゃうにゃにゃ。みゃうー」

「「「んなふんツ！」「」」

「んにゃ。なうーみゃん」

すかさず私たちの前にいた案内役ニャンコが命令口調？で指示し、何かやり取りをしている。少ししてこっちへしょうがないといった顔でトコトコと歩いてきた。

「あの．．．この子たちがまゆこちゃんにごあいさつをしたいと言っているのですが、いいでしゅか？」

ええもちろん！首をかしげて下からおねだりというあまりの可愛さにうんうん、とうなずく。

つてギヤアアアー！！

猫たち！小さな鴨を追いかさないで！新鮮ですって感じの誇らしげな顔で血みどろの鴨をくわえながら持つてこないでー！

ー＊ー＊ー＊ー

「次のくいきは魚の『青畑』でしゅ。ここへは子猫は入ることはできまちなん」ゆうわくにまけちゃうから、とトコトコ皆の前を歩き

ながらしっぱをゆらゆら。

慣れない野生の狩りなどの衝撃からグッタリしつつ、私の後ろをまだ少しびくびくしているミリアと、剣をいつでも抜ける状態でいるスミスさんが追っている。ちなみにその後ろからはまたまた数匹の猫がついてきた。現代の人間からすれば軽く仮装行列みたいに見えるんだろ。ちなみに私が恐怖のあまり手に出来なかった鴨ちゃん今日は今日の夕食に出されるそう。

たまに子猫が「にゃーん」「んなっ、んんなあっ」といつて足下にすりよってくるのを、デレッとしつつかわしながらゆつくと歩く。

「お！鮭の木発見」

細い糸で吊らされたシャボン玉のような泡の中に丸々一匹が浮いて泳いでいる。その隣りの小さな泡の中には、プリプリとした鮭の切り身が包まれていた。

「ちゃけはわたくちたちのだいこうぶつなんでしゅー」

しかし生きた魚の隣りに切り身ってこの幻想的な光景にはシュールな感じがする。

「先ほども猫が言いましたが、もちろん本来は川や草原にいますよ。魔術でこんな風に出来るのは城だからです。城まで運ばれる際に毒が混入されることなどは多々ありますからね」

ミリアの斜め前を歩いてるスミスさんが、目を凝らして観察している私ににこやかに話しかけた。

すると後ろから「このなわばりで知ったかぶりするな」という風にシャーッ！と威嚇音が響く。私の前を歩く猫はしらんぷり。一方スミスさんは猫たちの攻撃に備えいつも剣を抜けるような体勢で睨んでいた。まったく猫相手につて、少しあきれてしまう。

「スミスさん、剣はダメですつて剣は！何より、見学の許可は取っているから安全は保証されてるはずでしょ？」

普段は不可侵の掟でもあるかのようにこの畑は守られているのだ。

「まあそうなのですがね……」

「真由子様。ここの噂が本当ならば妥当なことだと思いますわ」

「噂？」

先ほどまで私と同じく、なかなか入れないという畑の木を怯えつつも珍しそうに眺めていたミリアがつぶやいた一言に首を傾げる。ちらりと視線を向けたスミスさんもこつちをみて頷いている。

「ええ、あまり知られてはいないのですが実は……」

「フーッ！」

「きゃっ」

ミリアが話そうとした瞬間、後ろからついてきていたオレンジ色の猫が飛びかかってきた。スミスさんが即座にミリアとミリアの側にいた私の腕を掴み自分の後ろへ追いやる。そして左手で剣を抜く。あまりの早業に制止させることが出来ない。

「スミ……」



次に起こってしまう惨劇を想像し、ぎゅっと目をきつく閉じてしまった。その時、後ろから声が聞こえた。

「久しぶりに来てみれば一体何をやってるんだお前は」

頭の上にポンと何かが置かれ、ふわりと後ろから風が吹き髪が揺れた。一瞬のことでもよくわからなかったけれど、空気が変わったのだけは分かる。目をそっと開けると、飛びかかってきた猫は分厚いシャボン玉のようなものに包まれ宙に浮いていた。そのフワフワした球は剣を受け止めグニヤリと形を変えている。

よ、よかった．．．．．思わずほっと息をついて肩から力を抜くと、斜め後ろにいたヤツの「くっ」と笑いをかみ殺した声が聞こえた。髪感触を確かめるようになでている手は外して欲しいんだけど！ただど一般ピーポーな私は腰が抜けそうになっていて声が出ない。両手を胸の前で握ったまま、思わず背後にもたれかかってしまった。

「オ、オルベルト殿下！」

隣りにいたミリアは慌てて私たちから離れ礼としてスカートを持って腰を浅く折る。その向こうからはスミスさんが忌々しいものでも見るように長剣を見ながら歩いてきた。

「お願いですから、俺の愛する剣のために気をつけて下さいよ」  
全く自分がかまえなかったからってなにかと嫌味なことしてくるんですからこの兄弟．．．

何かブツクサ呟きながら近くにきたので剣をよく見てみると、その刃にはべっちょりした水飴のようなものが付着していた。先ほど

の姿勢から手を前に組んだ直立不動のミリアは青ざめ表情を固くしていた。

「で、殿下。このたびは申し訳ございません。わたくしめの不注意でこのようなことに……」

「次はないと思え。だが今回は色々の特例であり仕方がない。それにどうしてこのような事態になったかはエウが伝えてきた」

「まあ今回は俺がいましたし大事になることはなかったと思いますよ。それにこの猫について詳しく知ってるのはごく少数ですし」  
スミスさんはフキフキし終わった剣を黒い鞘に戻しながら、あっけらかんとした口調でそう言った。

「エウ？」

ミリアへの言い草に少し不満を覚えたが、新たな名前の対象が分からずに首をかしげてその整った顔を見上げる。お、ようやく動けるし声出るようになった。しかし陽の光の中でみても相変わらず輝いてるな、サラッサラの髪と少しだけいじわるそうな紫の瞳は。

「……あの猫だ」

私と目線がパチつと合うとしばらく無表情のまま頭の上に乗っていた大きな手で髪をくしゃりとかき混ぜた後、親指で後ろを指さした。

あ！あの猫エウっていうんだ。そう思い振り返ってみると真つ二つに割れたシャボン玉から出てきたオレンジ色の猫とエウが一步前に出て、そして後方には数匹の猫が横一列に並び頭を垂れていた。

「おるべるとちやま。先ほどのことはわたくちのかんとくふゆきと  
ときでしゅ。もうちわけありましえん」

その言葉に小さくなっているオレンジ色の猫がブルリと震えた気がした。

「もういい。今後はきちんとそいつを見張れ。今日はもう各自持ち場へ戻れ」

「はい。きょうはこれでしつれいいたしましゅ。また何かございましてらすぐにおよびくだちやい」

命令しなれた口調の殿下は、片手を振って猫たちをフツと消した。

「ちょっと、殿下。他国から帰ってきて早々にセクハラですか？」  
だって私の腰には殿下の左手がずっとまわったままだったんだから。もたれかかった時からね。

どうしてこの一国の王子様はいちいちカンの触ることをやってくれるのだろぅ。．．．．正直調子が狂うんだよな。かつこいい出来るオンナ風の壁がうまく作れないというか。

「なんだせくはらとは？ああ茶を入れてくれ。それから調理場へ行って何か軽食を。スミスは念のためついて行け」

「かしこまりました。すぐに」

「はい。真由子様気をつけて下さいね」

何に気をつけるのかはわからないがスミスさんにとりあえず頷くと、2人は小走りで調達しに行った。きっともうすぐこの猫たちがこの森を走り回るのだろぅ。このお茶の合間にさっきの猫たちや

エウの話も聞けたら聞こう。噂って気になるし。

セクハラの意味を尋ねておいてわかったのか興味が失せたのか、噴水があり畑の森が見渡せるなだらかな丘の上へ連れていかれた。その間何とか両手で腰にまわされた悪の触手を払おうとするが、細く見えるような腕は思ったより力強くがっちり絡み付いているようだ。

殿下がスツと右手を軽く振ると、蔦など植物の彫刻が彫られたテーブルとイスが2つ現れた。腰を掴まれたままイスまで連れていかれたので「いい加減にしろ」と上を見上げると、座るよう視線が訴えてきた。最初はものすごく紳士だった気がするんだけどな。

「お久しぶりです。昨日のいつごろお帰りになられたんですか？」  
ゆつくりとイスに腰掛けると、向かいにお疲れの殿下がドカリと座る。

「昼過ぎだ」

「今回出向いた隣国はサルベニアでしたよね？炭鉱とシルク、そして繊細な織物で有名な。それでえっと、国王は最近ご結婚されたイリアス様は確かオルベルト殿下と年齢が近くて……」

うーん、と脳みそフルスロットルで隣国についてここ数週間で身につけたことを話す。

自分の今後の生活の為にと思って知恵をつけた。でももともと殿下やエリック君にも知識をつけるように言われていたので頑張ったのだ。いくら異界に飛ばした責任とはいえ、見知らぬ土地でまともな生活をさせてくれるパトロンだしね。

「ほお……墮落してはいないようだな。あの国は素晴らしいが

王は相変わらずバカなふざけもので子供のようだ。それに……

「そうやって淡々とその国で出来た話をしてきた。」

いくら快適ライフだからって墮落はしないよ失礼な。まあ感心してみてるのは嬉しい。しかしあんさん、腕を組んで偉そうに言うけどセクハラもふざけすぎだよ。

しばらく隣国に関しての話で盛り上がった。政治についてはよくわからなかったが、その国民性は国のトップと似通っているものだと分かった。なんでもその王に夜通し酒を飲まされたとか、スーリアスより街は整ってはいないが民の商魂がすごいとか。

話ながらだがふとたまに、骨格ががちりとした男らしいその指はまぶたの上を軽く揉んでいることに気付いた。

「あの、殿下がいない間にエリック君やサンドラ女史からあなたの激務の内容を少しだけ聞きました。昼夜問わず働き過ぎです。何かお手伝い出来ることでもあったら言って下さい」

「今は忙しいだけだ」

少しむっとしたようだ。気を使ったつもりだけど出しゃばりすぎたかな。

「それより何でお前は料理しないんだ？」

あ、そっちな。料理を持って来なかったことに怒っているのか？  
よほど日本の食事が食べたかったのね。

「私は（殿下と違って！）凡庸なのでまず知識をつけるのにいっぱ

いっぱいでした。一段落しましたし、調理場の許可はもらいましたので今日何か作ろうと思っていた所です。もちろん差し上げにくく予定でしたよ？」

「そうか。ならいい」

反則でしょう、いつもは不機嫌そうなその目元をアーモンド型に変化させる優しい笑みは！テーブルの上に組んでいた両手に視線を落とす。

「じゃあ今日の夕食を作ってくれ」

「わかりました。一国の王族の方の食事ですし、ハンスさんとまた相談させてもらってからにしますね」

イチオウね。

「ああ、それはいい。上には俺から言っておくから好きにしろ。それからこれはお前にだ」

そう言つてテーブルの上に右手を軽くかざすと、1m四方の白く大きな箱が私の目の前に現れた。箱には小さな金色の飾りがいくつもあつて見るからに高級品だとわかる。

「え？」

贈り物？なぜ？前にもドレスとか貰ったんだけど。ちなみにその宝石やドレスは「いらない」と返した。が、また返されて今はくローゼットの奥にしまわれてある。直径5cmの宝石がついたネックレスや黄金に輝くブレスレット、背中が大きくあいた真つ赤なドレスなんて着れないよ！

今回はなんだろうと目をパチクリさせて箱を観察してしまう。一方、殿下はテーブルに肘をつき組んだ指の上に顎をのせつつそんな

私を観察していた、ことを私は知らない。

「サルベニアの糸や布は上質だからな。先日返品されそうになったドレスなどはともかく、これらの土産は真由子の好みだと思うが？」

「お土産．．．。てゆうかこんなときに名前で呼ばないで下さい。何か裏があるのか疑ってしまいます」

いつもお前呼ばわりだったので、私はいぶかしげに顔を上げると静かに目が合った。名前を呼ばれたのは2度目、こっちにきてははじめてなんじゃないだろうか。そして相手は相変わらず微笑のまま呟く。

「裏、な。どんな人間にもそんなもの存在するぞ。今回は取引きだな。俺の名前を「オル」と呼べ」

「オル??」

少し眉を寄せて首を傾げる。それって私なんかが呼んでいいものなんだろうか。名前を呼ぶからこれをくれるってこと？

「ああ。早く開けてみる」

爽やかに髪をなびかせている殿下は顎をクイツと箱へ動かした。名前呼び云々はともかくこの箱の中身はすごく気になった。そつと金色のリボンをほどき蓋を開け、カサカサとしたものに包まれている紙を剥ぐ。

「ちょ！すごい！！きれー！い！なにこのシルクみたいな柔らかい布！私も持つてなかった！買えないよこんな高そうなの！」

ああああーもうすごい。レースも綺麗！あ、花の刺繍もある！

テンションMAXな私が手にしているのは．．．．．下着。箱

の中には真っ白なものからシャンパンゴールドやミッドナイトブルー、ベージュピンクなどのものにレースや刺繍がほどこされてあるブラやショーツ、そしてロングキャミソールが何着も入っていた。

実はわたくし、フランス製のランジェリーが好きで密かにインターネットで購入していたのだ。

日本の小悪魔とかセクシーとかブリブリなものや逆に下品に見えてしまいそうなものは苦手。その点、フランスのものだといやらしさを感じず、品良くセクシーにみえる気がしてボーナスが出た際はワクワクして購入ボタンを押すのだ。しまいにはフランスへ行ってしまうこともあった。誰にも理解されなくてもいい！私の秘密だったんだから！

そう、秘密・・・ひ、みつ？

ハッとして前を見る。

「な、なんで・・・」

「俺の名は、社長、だったよな。異界では」

今まで優しい笑みだったのに、片方の唇を上げニヤリという笑いに変化した。ゆっくりと顔をのせていた両腕を解き、左の肘はついたままで右手の指でテーブルをトントンとたたく。

そう、猫のあなたの名前は社長。だって私がつけたんだから。つまり異界では猫として接してきたわけで。

フランスランジェリーの雑誌をテーブルに置きっぱなしだったし、私は下着で部屋をうろろしたり、社長をお風呂に入れたり、うろろしたりギョッてしたりうろろしたりお風呂に・・・。



「きゃーーーーー!!!!」

私は目の前にいる男をお風呂に入れたり下着姿でも抱っこしたりしたんだ!! 破廉恥な! 私!

思いつきり下を向いて下着を手に持った両手で顔を隠す。穴を! 誰か穴を掘って下さい! f o r m e ! 過去を思い出し完全にパニック気味になる。

エリック君とかまぼこはなぜか同一のものだと理解は出来た。でも社長と殿下を同一として意識しなかった。なんでだろう。なんで! 恥ずかしい! ああー

．．．．．チラリ。

なんで今度はそんな優しい目になってんのよ! お風呂で裸を見たからってなによ! 猫だったことなんか知らなかったから不可抗力!

それに、そんな恋人へのサプライズが成功したような顔しないで!

\*

「．．．．．今、彼らは他人からどう見られているのか自覚した方が良いつすよね」

「ええ。完全にイチャついているようにしかみえせんわ．．．．  
!」

軽食を持っているミアは片手をギュッと胸の前で拳を握りしめて頬を染め「真由子様かわいい!」と呟き、食器やお茶などを抱えるミスは上からその笑顔を見つつ「そんなあなたがかわいいのに」

とため息とともに呟いた。もちろんミリアは「どうしましょう、今いくべきでしょうか」など興奮状態で聞こえるわけもない。

\*

「ねー。何か寒気しない？」

その頃、魔術学校ではなぜか嵐が吹き荒れたという……

## お土産ダーリン（後書き）

お久しぶりです。読んで下さりありがとうございます。

諸事情でこの作品をちょこっと編集しようと思っております。

詳しくは活動報告に書いてありますが、読まなくてもダイジョウブイな内容かもしれないので；

今更流れなどを変えるのは読んで下さる方に失礼と考えましたので、あまり編集はしません。むしろ全然変わってないと思います。編集した話のタイトル後には（改稿）といれています。もし「どこが違うんだ？」と気になった奇特な、いえ、興味のある方は読まれてみて下さい\*

それから今後アップがスローペースになります。すみません（；；；）でも本編もですが小話など書いていくのでまたたまにでも目を通していただけたら嬉しいです。ピョンピョンします！

## 小話1（前書き）

なかなか更新出来ない状況が続いてて・・・すみません(；；)  
なので今回は活動報告に掲載していた感謝小話3話と、ぷらすある  
ふぁ小話「悪魔と天使」です。続きの更新はもう少し先になります  
が、お待ちいただけると嬉しいです。

## 小話1

ー＊ー＊ー＊黒猫のお風呂＊ー＊ー＊ー

現在、真っ黒子猫ちゃんはおとなしく私の脚の間で泡につつまれている。今は背中や手を洗ってあげている。  
嫌がるかな、と思っていたけれど相変わらずトロロンとしてるみたい。

「猫この石鹸のにおいしい香りでしょ？」  
「んみゅ」

浴室にはローズマリー、レモンバームやオリーブなどブレンドされたハーブの優しい香りが漂っている。キツイ香りではない上に自然派無添加なので、これは動物にもいけると判断し猫を泡だらけにした。うゝむ、だいぶ汚れているな。

しばらくして真由子は「よっ」とつぶやき猫をこちら側へ向かい合うように向けた。すると猫はビックリして何だかおちつかなく視線をうつろうさせた後、またおとなしくなった。

なんだろうと思いつつもお腹を洗おうとしたが、真由子はあることに気付き猫を抱き上げた。

「あ、男の子なんだね、にゃんこ様は」

真由子は猫の下半身辺りを見ていた。

猫は胴体をぶら下げ、目をぱちりと見開き少しだけ舌が出ている状態で固まった。まるで見習い魔女と赤いリボンの黒猫が出る某有名アニメ映画のぬいぐるみだ。

お腹を洗いだすと猫は覚醒したみたいだが、なぜだか肉球で胸のあたりをむにむにと触ってきた。たまに触れられたりたたかれたりするとかすぐつたいとも触られたけど、子猫のお遊びとして放っておくか「こおら、やめなさい」と軽く払いのける程度にしておいた。

真由子は猫の泡を洗い流して洗面器にはったお湯の中に入れて、今度は泡をたっぷりつけたスポンジで自分の身体を鼻歌まじりで洗い始めた。

．．．．．その様子を猫がジーっと見ていたことを真由子は知らない．．．．．

ー＊ー＊ー＊真由子に会うまでと会ってからのかまぼこ＊ー＊ー＊ー

んみゅう．．．．にゃうー（お腹減った．．．．）

そこは馬小屋のような小さな小屋の隅っこ。小さな子猫が鳴いて

いる。

異世界渡りをしてみたものの、人間の姿でうろつろしていたらケイサツカンという人達に捕まって根掘り葉掘り聞かれそうになった。何だあの無礼者たちは！そう憤り彼らが目を離れた一瞬で猫になり脱走した。

魔術は見つかったら大変だ。まあそんな時は相手が勝手に消えるから放つとけばいいけど。

なああう（寒い）

にやうん、うにやつ（いい加減帰るかなー。でもまだまだ）

あー温かい食事が食べたいなどとぼやいていると、うるさいと言われた。

怒鳴った女の人の前に出てみたのはいいが何だか泣きそうな顔だ。ケイサツカンじゃないよな？少し警戒してしまう。その人は僕らの国では高級輸入品である魚の練り物「かまぼこ」を取り出した。ふむ。僕にくれるには悪くないチョイスだ。調理されてないのは猫だから大目に見よう。

どうやら真由子さんというらしいが美人に拾われてラッキー。だけどネームングセンスはひどいもんだ。

仕事から帰った真由子さんに「にやーん」と言つとご飯をくれる。城内でいつも食べている「食事」ではなく温かい「ご飯」。

ミルク粥、蒸し鶏や蒸し野菜、いろんなスープに白米をいれてくれるのが定番なんだけどどれも手作りで素朴な味がする。たまに真由子さんの皿から御馳走を盗む。猫だからこれはダメ！って怒られるけど僕人間だから大丈夫だしね。いつも甘えさせてくれるしたまに怒られる。

これなら、この人ならアイツも．．．

ある人物が浮かんだが、真由子さんがくれたジューシーな唐揚げに夢中になってしまった。でも真由子さんが食べてる香辛料の香るやつがいいな．．．。ジツと見てるとダメ！といつも通り怒られ耳が垂れてしまった。

一緒に眠ると熟睡出来るし変な名前だけどこかまばこと呼ばれるのも大好きになった。でも真由子さんはたまに悲しそうな顔したり少し泣くんだ。僕はそんな時、静かに寝た振りをする。この存在だけは消したりしたくない．．．側にいたいから。

数日後、もう一匹の猫がやつぱりやって来た。きっとテレビとかの力デンセイヒンに驚いたり、真由子のお風呂や抱っここの洗礼を受けるであろうことを想像しニヤフツニヤフツと床を叩いて笑ってしまった。

そんな僕を真由子さんが見て気味悪がっていた。ガーン



ー＊ー＊ー＊電子レンジ＊ー＊ー＊ー

餃子を作るにあたりひき肉をレンジで解凍する。

かまぼこは社長に「うにや、なふんっ」と話しかけブーン、と音をたてる冷蔵庫の上の電子レンジの前に連れてきた。何とも滑稽な光景だ。社長は不思議そうにまわるひき肉を見ていた。

あーあーニヤニヤしてる。絶対にあの低レベルないたずらする気だ。

「チーン!!」

「!!」  
びつくううううっ!

社長は軽く飛び上がり、紫の目は見開きシャンパンゴールドの毛はライオンのごとく逆立っている。

「ううんにやにやにやにや」

笑う猫はすでに冷蔵庫から降りてソファへ向かっている。まるで驚いている猫をバカにしたように。

しかし忘れる事なかれ。

かまぼこはレンジを初めて見た時に、高く飛び上がっただけでなく「んにゃああああ！」と叫びつつ冷蔵庫から転げ落ちかしかし床を蹴り、大ジャンプして私の胸に飛び込んでプルプル震えていたのだった……………

――――悪魔と天使――――（書き下ろし）

俺は王立騎士団第4隊長、スミス。ちなみに、第3隊長はオルベルト殿下だが、現在は公務が忙しいから変わり者の副隊長が代行している。その副隊長つても個性的なんだよな―

殿下とは魔術学校からの知り合いだし殿下兄弟とは昔からまあ何かと縁があり仲が良いと思う。うん。（注・実際はいじられているだけ）

そんなオルベルト殿下は謎の存在だ。

第3隊長の地位は公に対する肩書きにすぎないようにみえる。つまり、国を短時間で動かすには肩書きが多く必要だと考えているのではないか。なら政治の重要なポジションへ就けばいいのに就かないまま、老いぼれ敏腕宰相の補助ばかりしている。（ちなみに宰相は国一番の個性的だと俺は思う…………）

まあ薄々予測はついてはいるが、一体なぜそこまで、と思うこと

もある。

\*

「ホエー！」

ふわふわと何かが飛んできた。

本来なら植物の水やりに飛び回る手のひらサイズのジョウロクジラが、頭から水をまき散らしながら俺の頭の上に降り立ち口をパクパク開けながら伝言を伝える。

「スミス！いいもの見せてやる。すぐに来い」

頭から水を滴らせ、またか、という嫌な予感に肩を落とした。

「俺は植物じゃないのにジョウロクジラって。全く、何でもかんでも魔術を吹き込めるのは天才なのかバカなのか、ただの楽しみなのか何も考えていないのか……」

真由子様がこの国の知識をつめこんでいる間は、別の護衛が部屋の外で警護しているので比較的隊長として騎士団へ戻ることが多くあった。そんな中、あの悪魔が伝書クジラを飛ばしてきたのだ。思わず下を向いて背中をポリポリと掻き歩き出す。

「どうせ絶対良いことじゃないな……」

その呟きはため息と共に、頭上のホエー！ホエー！という鳴き声にかき消されてしまった。

騎士宿舎から城の入り口の庭にさしかかった時、優しいアルトの  
声が響いた。

「あら？こんにちは。その格好はどうなされたのですか？」

風で周囲の花々がふんわりと揺れ、それと一緒に揺れる栗色の髪  
をした天使に俺は目を奪われた。慌ててキリツと気を引き締めたの  
は男の見栄だ。

「どうも、ミリアさん。まあこの格好は．．．なんでもありま  
せん」

ほんと悲しき力ナ。見栄をはった所で今の自分は濡れ鼠。水がし  
たたってきて思わず手で髪をかき上げる。

「そうですか。困ったものですわねえ」

水を全て吐き終わったのか、頭に偉そうに鎮座しているクジラ（  
追い払っても頭上に来る）を見て何でこんなことになっているか分  
かったかのようだ。口に小さな片手をあててクスクスと笑っている  
その揺れる華奢な身体を抱きしめてしまいたい衝動を拳を握りグツ  
と押さえる。

「これどうぞ。先ほど真由子様の部屋に飾る花をとってきたんです。  
その時に包んでいたタオルなのですが、よければ使ってください。  
風邪ひいちゃいますよ？」

「え．．．．？」

頭の上にいい香りの桃色の柔らかい布がかぶせられる。

面白そうに笑っているが少しだけ心配そうに下から覗き込んでく  
る天使に、興奮するなと言う方がおかしいだろう！だってずっと前  
から気になっていたんだ！しかしあまりの突然の接近に固まってし  
まった。ミリアさんは精一杯背伸びをして髪や肩など濡れている所

を拭き取ってくれていた。

少し下を向いていた俺の目に飛び込んできたのは、柔らかそうな首もとと胸元。慌てて現実引張られる。

「もっ、もももう大丈夫ですからっ！」

動揺のあまり脱兎のごとく逃げてしまった。その胸や腰を掴んで思いつきり上や下から……。なんて考えてしまった自分に自己嫌悪。騎士としてあるまじきことだ！

何があつたのか分からずポカンとしているミアは「?? 不思議な人ねえ」と、のほほんと呟き抱えた花を抱き直し城へ入って行った。

城の中にいたエリック様の元に行くと、すでにソファに前屈みぎみに座り目の前のテーブルに置かれた四角い物体をみていた。近づき何かと聞いてみると、それはどうやら異界の「てれび」というものらしい。内部はよくわからないから適当だが魔術を込めれば映像が映し出せるように技術者に作ってもらったらしい。なにが面白いのかクククツと笑いながら侍女にお茶を頼んでいる。

「ここに座りなよ。異界でのあいつが見れるぞ」

「はあ。じゃあ失礼します。異界でつてことは真由子様の家に滞在

していた時のことですよね？」

「そ。傑作なんだこれが。魔術で変化した兄さんも珍しいけど」

自分の隣り、てれびの画面が見えるような位置に促され腰を下ろす。そしてエリック様は侍女が運んできた飲み物を若干口がにやけたまま一口飲む。

「らしいですねえ。変化したんですよえ。あのオルベルト殿下が  
．．．」

置こうとしていたカップがガチャンと音を立てた。

魔力が強い者は必要に応じ猫に変化することが出来る。ただ、好き好んで変化する者は少ない。面前のエリック様は遊びでよく猫になっているが、男だと変化した可愛い姿を見られたくないと感じるやつは多い。

「まあ見てのお楽しみ」

そう言ってれびのちゃんねるのボタンを押した。

するとブンツ、っと言う音と共に真由子様と猫姿のエリック様が食事をとっている所が映った。箱から映像や声が聞こえるという不思議な技術に目を丸くしてしまう。

小さなテーブルの上には、牛肉とニンジンとタマネギとじゃがいものシチュー、それとバケットとサラダが置いてあった。  
『にゃあーっ』

『あら、催促コール？待ってねー。かまぼこ用に玉ねぎとかが入っ

てないの作ったから』

そう言って映像の中の真由子様は、食べやすいよう砕いた野菜入りシチューの小さい皿にバケットを入れふやかし、黒猫にそっと差し出した。その間もずっと黒猫は真由子様の足下でスリスリしていた。

『さ、どうぞ。バターと牛乳から作るシチューは手間がかかるけど美味しいのよねー。おいし?』

はぐはぐ食べている猫に向かって屈託なくにつこりと笑う。

『んにゃふーふにゃ!』

皿に顔を突っ込んだまま、しっぽを振り猫は喜びをあらわにしている。

「おっと、これじゃない。ちゃんねる操作はむずかしいな。これか?」

そうぶつぶつ言ってエリック様は違うボタンを押したりしている。

猫に変化することを嫌がるオルベルト殿下の気持ちは分かるけど、ここまで猫になりきっているエリック様は恥ずかしくないんだろうか? . . . . 恥ずかしくないんだろうな。殿下だけど「殿下と呼ぶな! 立場が相手にすぐバレるじゃないか!」ってくだいだし。

『きゃー! 暴れちゃだめ!』

『フーツ! ! !』

『かまぼこは見守ってくれてるだけなのに . . . .』

『にやつふん』

てれびの画面には真由子様が浴室と思われる場所で泡だらけで水のせいでシヨボーンと小さくなった成猫のオルベルト殿下を洗っていた。それを近くで眺めるかまぼこ、もといエリック様。

思わず「ブハッ！」と吹いてしまった！

「笑いものだろ？あの兄さんが猫の姿で女に身体洗われてんだぞ」

「くっ、これがあの仕事人間で色男と噂されるオルベルト殿下の御姿！ダメだ・・・わ、笑いが、ギャハハハ！す、すみません！でも笑い、がとま、り、ません！」

真由子様と向かい合って挙動不審になる猫を観て、さらにソファの上で腹を抱えて爆笑してしまった。

エリック様は「だろうだろう」と頷き自分の撮った映像に大満足して見入っていた。ある意味悪魔だ。

ちなみに真由子様の姿はエリック様の魔術により、よく見えないように白いもやが立ちこめていた。ううん、残念。俺的にもあのスレンダーで色白のプロポーションはグツとくるものがある。ま、やつぱり穏やかに笑う優しくって肌も柔らかかそうミリアさんが一番だけどっ。

その後、朝起きて真由子様の胸元に収まりおだやかに眠る猫を観



てまた笑い、起きた猫が部屋の隅で若干恥ずかしそうにしている所でまた大爆笑スパイラルへ落ちた。

そしてしばらくの間、オルベルト殿下をみるとにやけそうになっていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2015s/>

---

あなたとご飯と私

2011年7月2日18時24分発行